

# 羊 齒

第 33 号

支部結成 55 周年記念号

2011 年 (平成 23 年)

新ハイキングクラブ 横浜支部

### 誌名「羊歯」(しだ)の由来

SHC横浜支部の文集「羊歯」は、支部が発足してまだ毎月の会報もないころから年に数回発行され、いわば会報の代わりのような役割を果たしていたようです。

会報が初めて発行されたのは昭和34年11月で、その後「羊歯」は年に数回発行されてきましたが最近では5年ごとの記念誌として発行されています。

「羊歯」の誌名は、当支部設立者の一人「浜野条治」氏によって命名されました。それは「しだ」の研究者である「行方沼東<sup>なめかたしょうとう</sup>」氏を友人にもつ浜野氏が、ご自身も山旅の毎に「しだ」を収集していたことから、これにあやかって「羊歯」と命名なされたものです。



# 「羊歯」

(しだ)

第 33 号

支部結成 55 周年記念号



2011 年 12 月発行

新ハイキングクラブ横浜支部



## 横浜支部創立 55 周年を祝して

支部長 芹沢 隆久

平成 18 年に大きな節目となる創立 50 周年を祝したばかりなのに、もう 5 年も経ったのかなあというのが率直な感慨です。その間、行く人、来る人ありましたが、解散を余儀なくされた支部もある中で、幸いにも会員の仲間が増えていますことは大変喜ばしいことと思います。

こうして 55 周年を迎えられるのも諸先輩、諸会員の皆様が「山」を愛し、「横浜支部」を愛して、営々と築いてきた情熱と努力の賜物と、敬意と感謝を表する次第であります。この間、支部では 6 番目となるホームページの開設、神奈川県で開催された天皇皇后両陛下がご臨席された「全国植樹祭」への参加、そして何よりも多くの支部山行を実施してきました。

今年は 3 月 11 日に M9.0 という未曾有の大地震、大津波に見舞われ、多数の犠牲者、被災者を出し、日本中が喪に服するような暗い状態に陥りました。しかし全て自粛、自粛で内に籠ってしまったら、日本は本当に沈没してしまいます。

今こそ、外に向かって行動すべき時です。山に旅に大いに出かけようではありませんか。それが世の中を元気づけ、私たちの心をも明るくし、体も活性化する源と思います。

「山」は生涯の友であり、師でもあります。

山と自然の厳しさも怖さも充分熟知した上で、挑戦や攻撃でなく「山」と共に歩いて行きましょう。

「山よ ありがとう 55 周年！」

そして 60 周年、65 周年へとこの襷を繋いで行きましょう。

平成 23 年 12 月

# 横浜支部創立 55 周年 おめでとうございます

新ハイキングクラブ会長 鮫島 員義

昭和 31 年に新ハイキングクラブに始めて支部が発足し、翌年までに横浜支部を含めて 13 の支部の立ち上りがあったと記録にあります。それ以来 55 年間、紆余曲折があり現在まで残っている支部は 6 支部です。

この長い年月にわたり横浜支部のバトンの受け渡しをし続けてこられた支部長の方々ははじめ、役員や、これを支え続けてこられた支部会員のみなさま そしてご家族の方にも敬意を表させていただきます。

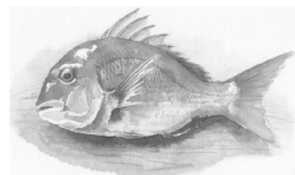
山を歩いていると巨木に出会います。年輪を重ね、太い幹はどっしりとし、台地にしっかりと根を張り、威風堂々とした姿に魅せられます。そっと幹にふれてみると、なんとなく温かいものを感じ、癒される気さえます。「良く来た、よくきた」と語ってくれているようにさえ感じる場合があります。

横浜支部も 55 年間、多くの方々に支えられ、愛され続けてきた結果、その長い歴史からくる温かみを感じております。もちろんその間様々な問題があったこととは思いますが、みなさまの「何とかしよう」との気持ちの集まりで解決してこられて、今日があるのだと敬服いたします。

これからも様々な考え方を持った新しいメンバーが加わるのが予想されます。この新メンバーになじんでもらい定着させ、一緒になって「安全で、楽しく、バラエティーに富んだ山行」を継続していくことを通じて、横浜支部がさらに発展されることを願っています。

これからの社会において「読んで、登って、仲間ができる」の新ハイキングの役割はますます大切であり続けると考えています。

横浜支部が今後ともますます発展し、60 周年・70 周年記念をみなさまと一緒に祝うことができますように、一層のご活躍・ご健康を願って止みません。



## 「羊歯」 33号 目次

頁

- 4 横浜支部 55周年を祝して-----支部長 芹沢隆久  
5 横浜支部創立 55周年おめでとうございます  
新ハイキングクラブ-----会 長 鮫島員義

### § 大震災に寄せて

- 8 「朝は どこから」 ----- 井上 忠秋  
9 自然の美しさと怖さ ----- 板垣恵美子

### § 10 グラビア

写真・油彩・水彩 P11～P18

#### § 紀行

- 19 旅は心楽しい 中山道を歩く ----- 茂木 武  
25 数字で見る中山道 ----- 御園 培博  
28 日本百名山完登 ----- 金本 勲  
30 心に残る百名山 ----- 服部八重子  
31 仙人池裏鋸岳縦走 ----- 飯島 和子  
32 山行報告 白銀山 ----- 齋藤 郁夫  
34 語り部と歩いた熊野古道三日間 ----- 湯浅 克枝  
36 ヒマラヤ・マウンテンフライト ----- 祖父川精冶  
40 ペルー クントウル・ワシ遺跡を訪ねて ----- 細井 陽子  
42 南蛮の巡礼(スペイン サンチャゴ巡礼) ----- 小澤勝太郎  
45 佐渡・金北山 一人旅 ----- 依田 ふみ

### § 痛い体験

- 46 蜂騒動顛末の記 ----- 今泉美代子

### § 詩

- 47 四季 ・ 山 ----- 中村 純平

### § 私と山の事始め かかわり こだわり

- 48 父と登った初めての北アルプス ----- 栗田 克行  
50 私の山行 ----- 竹尾 亮三  
53 古希を過ぎ尾瀬を歩いた ----- 福田 徳郎  
55 山との出会い ----- 柿沢 泰子

- 57 私の山登り～山遊び～山歩き ----- 石井 純一  
 58 ブナから始まった山歩き ----- 古屋喜代子  
 60 なぜ山歩き？ ----- 宮本 省治

俳句

- 61 山姥の五七五 ----- 長谷川美江

随想

- 62 ホームページ事始め 横浜支部とホームページ ---- 和智 邦久  
 63 山での怖～い思ひ出 ----- 芹沢 隆久  
 65 私と山の文学書 ----- 青柳 征勝  
 67 私の山とウォーキングについて ----- 谷 真理子  
 68 ふたつの毛無山 ----- 渡部 道明  
 71 ありがとうございます ----- 佐藤 哲夫  
 72 「2011 はる」 ----- 鈴木 国之  
 76 吉林省から世界へ ----- 玉川 恵子

平成 18 年～平成 22 年の活動まとめ

- 77 過去 5 年間の横浜支部山行実績を見る ----- 池田 邦雄  
 80 年度別山行企画数・実施数及び参加者数等の状況  
 81 山行計画地域分類  
 82 山行「係り」担当状況  
 83 平成 18 年度～平成 22 年度間の支部山行実績（第 1479 回～1869 回）  
 93 SHC 横浜支部 55 年の歩み  
 95 支部創設 55 周年記念集中登山 箱根明神ヶ岳 ----- 井上 忠秋  
 97 会員名簿  
 99 編集後記



「東京から見える山見えた山」 横山厚夫 1971-6 丸の内出版より

## 「朝はどこから」

井上 忠秋

黙禱 3月11日の東日本大地震は、死者・行方不明者合わせて2万5千名弱を数える空前絶後の激甚災害になってしまった。被災状況は、国民はもとより、全世界の知るところである。

この寄稿文の書き出しを最も悲痛な慣用句で始めることになるとは夢にも思わなかった。「羊歯」の寄稿文の表題を国民歌謡で広く親しまれている「朝はどこから」にしたのは、私の好きな歌であり、一番の歌詞が朝はあの空越えて、雲越えて光の国から来るのであるが、続く歌詞ではこれを否定し希望に燃える家庭から来ると謳わせている。前段は自然現象と捉え、後段は個人の心の持ちようを示し、ここに重きを置いているが、私にとっては光の国も希望の家庭もともにすばらしい。ある詩人は、日は思念を明るくすると謳っている。被災された方々に必ず明るい希望に満ちた朝が来ることを信じてやまない。 合掌

私は、山頂で、また山小屋でご来光を拝することを楽しみにしている。いざ光拝にあたっては、3時起き、4時起きなどその時その時の季節や置かれた状況の中から適切に判断している。と思うのであるが、その日の体調が良いか、悪いかによっても1日の気分を左右する大事な判断要素である。いつも前夜から明日のスタートが最良の状態で行えるかどうか占っている。

朝を迎え、陽光が飛び散るがごときに横溢するなら、希望の矢にも思え、勇気が湧いてくる。思えば相模湾の海に輝く日の出が大山の前面に当たれば幸福な一日の始まりだ。冬富士の白銀の頂きに、また剣、穂高の岩肌、槍の穂、甲斐駒の白い頭、浅間山の煙に朝日が射し入り赤紫から茶褐色へ更に白へと色の変化が順に頂から山腹に広がりを見せる様は、希望から安定への動きと思えるのである。

加賀白山の頂上にある白山神社奥の院では、神主が参拝者に日の出を祝い、お払いと御酒を振舞ってくれる。あわせて視野にある山々の説明もしてくれる。誠に有難い神事である。

山に雨はつきものだから朝から快晴のときは、すばらしいスタートが切れる。朝日を浴び希望に燃えて歩き始めたら、折々に休みを入れつつ、花や岩の変化を楽しみ、山に戯れながら、自然をあるがままに歓受しよう。 さあ、ゆっくりでいい、次の頂に向かって確実に前へ進もう。朝日が背を押してくれている。



## 自然の美しさと怖さ

板垣 恵美子

今回「羊歯」の編集委員をやることになり、何を書こうかと悩んでいたところ、決して忘れることの出来ない大惨事が起こり、日本中がいや世界中の人々が悲惨な気持ちにさせられました。

「2011年3月11日 東日本大震災」2万人以上の死者や行方不明、そして、ご家族を失った方々、家屋をすべて失った方々、ただ可哀想で、しかし、何もしてあげられないもどかしさ、一日も早く復興されますように、ひたすら祈るばかりです。

ここで、つくづく、自然の怖さを感じさせられました。あの美しい景色、のどかで、穏やかなあの海を眺めていると、今自分が悩んでいることなど、とても小さなことに思え、心癒されました。

ところが、いったん暴れだすと、何万人もの人々の命を奪う、恐ろしいものになることを、改めて認識しました。

今回の「羊歯」のテーマは「山よありがとう」ですが、同じ自然でも、今回の震災では、決して「海よありがとう」とは言えません。

たまたま今回は海底で起きた地震ですので、被害は海の近くでしたが、山での地震も何時あるか分かりません。我々は美しい自然を求めて、山に登り続けていますが、自然の怖さを、頭の片隅に置いておかなければならないなあと、改めて思いました。

美しい自然を求めて山に登り続ける、どこも同じ景色はない、その山その山景色が違う、同じ山でも季節によって違う、同じ季節でも去年と今年は違う、自然は常に変化している、海でも山でも、だからこそ何回行っても飽きない。

自然は生きている、そして時々暴れだす。人間のちっぽけな力では抑えきれない。人間は自然には勝てない、なのに、自然を犯す人々がいる、だから自然は暴れだすのだろうか？

しかし、雄大な自然を独り占め出来た時、なんとも言えない感激のひとつきです、やはり「山よありがとう」です。

生きている自然を大切に、そして自然を愛する気持ちを大切に、しかし、自然の怖さも忘れずに、これからも山に登って行きたいと思います。

平成23年3月記

## グラビア案内

頁

○横浜支部 55周年記念集中登山

11 記念集合写真 明神岳山頂にて 2011-10-29 撮影 福田 徳郎

12 記念集合写真 旅館強羅文の郷にて  
2011-10-29 撮影 福田 徳郎

○「ふるさとの富士」写真展

13 ふるさとの富士 投票第一位作品  
精進湖より富士山ご来光 竹尾 亮三  
投票第二位作品 最北の富士（利尻富士） 福田 徳郎  
投票第二位作品 夕景の赤富士 渡部 道明

14 油彩 初夏の裏磐梯  
谷川岳（一の倉沢）の秋 中村 純平

15 水彩 仙人池とハツ峰 飯島 和子  
薬師岳と五色ヶ原

16 水彩 日本一美しい貯水塔 川野奈津子  
見沼のたんぼ

17 写真 鏡池に映る槍ヶ岳・穂高連峰 昼光撮影 足立 忠彦  
鏡池に映る槍ヶ岳・穂高連峰 朝

18 写真 尾瀬のオゼコウホネ 竹尾 亮三  
アポイ岳のエゾキスミレ





2011年10月29日 支部創立55周年記念集中登山 相模 明神ノ岳山頂にて撮影 福田徳郎



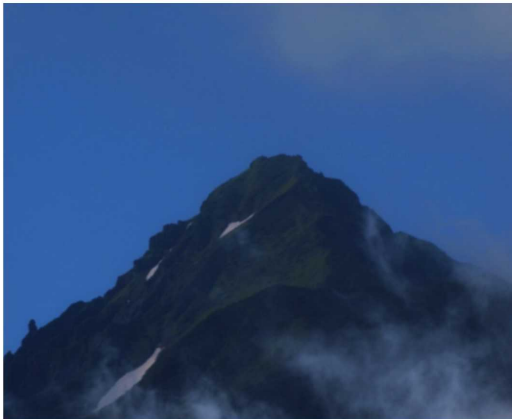
2011年10月29日 支部創立55周年記念集中登山 強羅旅館 文の郷にて 撮影 福田徳郎

支部結成55周年記念 「ふるさとの富士」写真展



精進湖畔 ご来光 撮影 竹尾亮三

2006年11月8日 6:35AM  
富士 ファインビックス30使用



優秀作品 第二位  
日本最北端の富士(利尻富士)  
撮影 福田徳郎

2010/07/13 鴛泊港岸壁より  
リソハスE-3 600ミリ使用



優秀作品 第二位  
夕景の赤富士  
撮影 渡部道明

2008/03/24 川口湖畔  
ペンタックス K10D 400mmF2.8使用

\*「ふるさとの富士」写真コンテスト 応募作品51点中上掲3作品が優秀賞に入選しました。



投稿作品（油彩）



初夏の裏磐梯

中村 純平

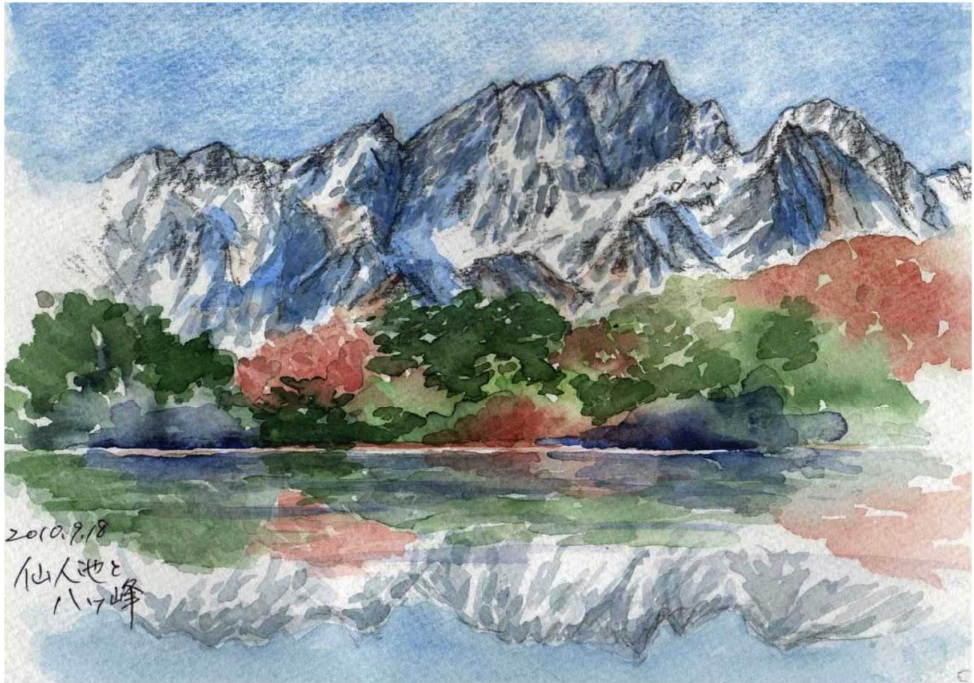


谷川岳(一の倉沢)の秋

中村 純平



投稿作品（水彩）



仙人池とハツ峰

2010-09-18

飯島和子



薬師岳と五色ヶ原

1996-08-10

飯島和子

## 投稿作品（水彩）



多摩湖 日本一美しい取水塔 2009・11 川野奈津子



見沼のたんぼ・民家園 2010・10 川野奈津子

## 投稿作品（写真）

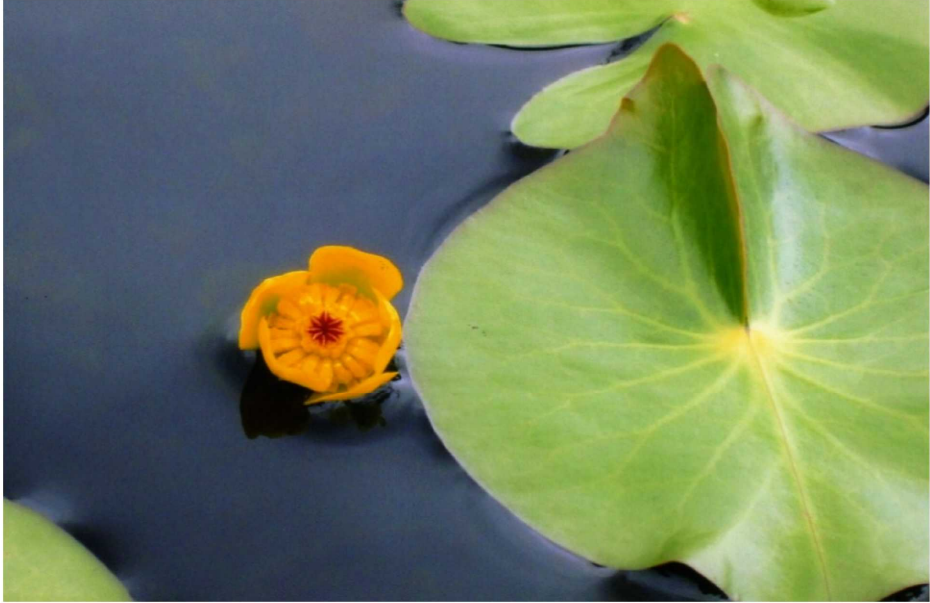


鏡池に映る槍ヶ岳・穂高連峰 昼 2002-10-12 撮影 足立忠彦



鏡池に映る槍ヶ岳・穂高連峰早朝 2002-10-13 撮影 足立忠彦

投稿作品（写真）



幸運にも出会った尾瀬のオゼコウホネ 2009-7-22 撮影 竹尾亮三

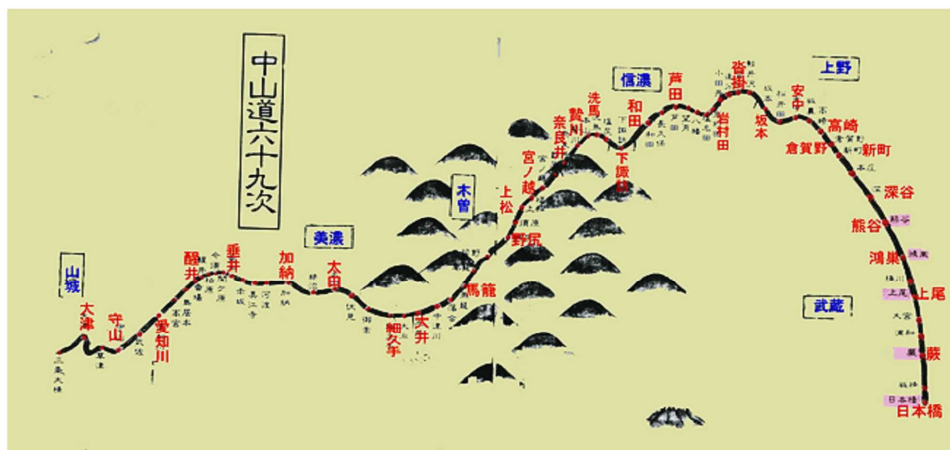


三段の影は？ アポイ岳のエソクスミレ 2011-6-7 撮影 竹尾亮三



# 旅は心楽しい 中山道を歩く

茂木 武



イラスト制作 和智邦久

私達は芹沢さんの係りで約3年に亘り、中山道歩きを実施。今年6月、京都の三条大橋へ、中山道を完歩。横断幕広げ、芹沢さん中心に仲間の喜びの顔と顔が一枚の写真に収まった。

**武州路** 中山道は江戸と京都を結ぶ大動脈。日本橋から本庄宿、神流川を越え上州路へ。

27日朝、私達の中山道には16名が参加し開幕。日本橋で記念碑等を見て出発。昌平橋で神田川を渡り神田明神、湯島聖堂と過ぎる。巢鴨とげ抜き地蔵尊はお祭りの賑わい。滝野川通り左へ近藤勇の墓。志士達が生きた時代を偲ぶ。最初の板橋宿へ。縁切り榎、志村一里塚で有名。戸田橋で荒川を渡り埼玉県。戸田から蕨へ。蕨宿では本陣の資料館や蕨城跡の和楽備神社へ寄り蕨駅へ。

(日本橋→蕨 18.7km : 平20年9月歩く)

26日朝、17名が参加、蕨駅を出発。辻の一里塚から焼米坂、調神社へ。浦和宿を過ぎ武蔵国、氷川神社に参拝。上尾駅へ。

(蕨→上尾 18.1km : 平20年10月歩く)

29日朝、19名が参加、上尾駅を出発。まず真言宗古刹の遍照院。本堂前に弘法大師、興教大師の像。桶川宿では唯一残った旅籠屋「武村旅館」格子の玄関に往時を偲ぶ。北本宿から中山道古道へ。原馬室一里塚。塚の上の記念碑に全員登る。鴻巣宿へ。左折し勝願寺へ。左に本陣跡碑を見て鴻巣駅へ。

(上尾→鴻巣 10.9km : 平20年11月歩く)

24日朝、18名が参加し鴻巣駅を出発。右の法要寺は真言宗。慶安年間に前田家が宿舎に使用した。右に箕田氷川八幡神社。隣の宝持寺は曹洞宗の古刹。踏み切りを越え西側へ。権八地蔵から熊谷堤へ。風が強く展望広がる。榛名、妙義、浅間山と壮観。「東竹院」は見事な庭園だった。熊谷駅へ向かう。

(鴻巣→熊谷 16.3km : 平21年1月歩く)

28日朝、参加者18名で熊谷宿を出発。本陣竹井家の星溪園を見る。池中心の回遊式庭園で立派。国道を左へ新島一里塚。見上げる大ケヤキは人の目を引く。深谷駅は洋風な煉瓦造りで立派な駅舎だ。

(熊谷→深谷 11.1km : 平21年2月歩く)

28日朝、参加者17名で深谷駅を出発。飯島本陣跡、常夜燈を見る。庚甲塔が並ぶ百庚申から本庄市街。歴史民族資料館と安養院に寄る。御嶽開山の祖、普寛上人の墓へ。更に浅間山古墳を見る。一里塚跡を過ぎ、神流川の長い橋を渡る。途中に県境の標識。武蔵国から上野国へ、感銘。新町駅へ。

(深谷→新町 22.5km : 平21年3月歩く)

**上州路** 神流川を越え新町宿から北関東の上野七宿を歩く。碓井峠を越えて信州路へ。

26日朝、12名の参加者で新町宿を出発。八坂神社、芭蕉句碑を見る。本陣跡を見て烏川の柳瀬橋を渡る。堤防上に旧渡し場跡を見る。倉賀野追分に常夜燈。本陣、脇本陣碑を過ぎ倉賀野神社。樹木繁る国の史跡、浅間山古墳に。高崎市内へ。愛宕神社、城址公園を見て高崎駅へ向かう。

(新町→高崎 11.8km : 平21年4月歩く)

23日朝、参加者11名で高崎駅を出発。高崎宿は井伊直政の城下町。商業の町として賑わった。田町通りを進み左折。新君が代橋の袂に阿弥陀像安置の満日堂を見る。高崎は達磨の町。橋を渡り達磨寺へ。中国の渡来僧が開山。沢山の奉納ダルマ見る。右の八幡宮へ。上野国一社の標示ある。木陰が涼しかった。板鼻宿本陣は公民館。和宮に関係の書院、月宮の碑も。安中駅へ向かう。

(高崎→安中 10.5km : 平21年5月歩く)

29日朝、参加者13名で安中駅を出発。本陣跡碑、武家屋敷を見学。原市杉並木を見て進む。一里塚跡、地蔵堂と過ぎ、妙義常夜燈を見て松井田宿へ。横川駅も過ぎる。宿場風町並みの坂本宿へ。今日は霧積温泉で一泊。30日朝、坂本宿を出発。旧道から急登。刎石坂覗き、山中茶屋をへて碓井峠。熊野神社に参拝。賑やかな旧軽銀座を歩く。芭蕉句碑、本陣跡碑も。中軽井沢駅へ。

(安中→沓掛 34.1km : 平21年8月歩く)

**信州路** 信州路へ、噴煙の浅間山を見て進む、和田峠を越え下諏訪へ。塩尻峠越えも。

26日朝、参加者10名で沓掛宿を出発。男沓掛時次郎の碑を見る。追分一里塚を過ぎ、追分郷土館を見学。その先に分去れ碑。左中山道、右北国街道と示す。御代田一里塚では桜は珍しい。小田井宿を過ぎ、龍雲寺に寄り岩村田宿へ。

この日佐久ホテルに一泊する。27日朝、出発。武田信玄ゆかり西念寺へ。ここは信州味噌発祥の地。老舗の前を通る。相生の松は歌碑だけ残る。塩名田宿本陣を過ぎる。千曲川の中津橋を渡り八幡宿へ。百沢橋から旧道へ。瓜生坂を越え望月宿。本陣門と資料館が再建。次の茂田井宿は信州の酒処。白壁の酒蔵が続き、芦田宿に着く。

(沓掛→芦田 30.2Km : 平 21年 9月 歩く)

31日朝、参加者11名で芦田宿を出発。松並木道へ。笠取峠近く公園の紅葉は見事。長久保宿本陣前を過ぎる。宿場は直角に曲がる。落合橋、和田橋を渡り左折。

左に依田川を見る。三千僧接待碑、若宮八幡宮と過ぎ、和田宿本亭旅館へ、1日朝、和田宿を出発。和田一里塚から右折、唐沢一里塚に着く。三十三体観音から接待茶屋に着く。東餅屋から自然林の上りが続き、最高所の和田峠に着く。西餅屋も過ぎ、浪人塚、木落し坂、諏訪大社春宮、秋宮に参拝。下諏訪へ。

(芦田→下諏訪 35Km : 平 21年 10月 歩く)

28日朝、参加者15名で下諏訪駅を出発。先ず春宮奥の万治の石仏を見に行く。東堀の一里塚も過ぎ、橋近くの河原で昼食。茶屋本陣跡、石船観音も過ぎ塩尻峠の上り。峠には展望台。明治天皇の野立碑も。木曾義仲ゆかりの永福寺へ。義仲の馬を洗った太田清水に寄り、洗馬宿千倉館に着く。29日朝、宿舎を出発。牧野一里塚、本山宿、日出塩一里塚を過ぎると「是より南、木曾路」の碑に出会う。山道から桜沢茶屋、若獅子一里塚をへて贅川駅に着いた。

(下諏訪→贅川 29.7Km : 平 21年 11月 歩く)

**木曾路** 木曾路の碑から奈良井宿、鳥居峠越え、妻籠宿、馬籠峠も越え美濃路へ。

28日朝、参加者15名で贅川駅を出発。贅川番所、本陣跡碑を右に見て跨線橋を渡る。右に樹齢千年トチの大樹は見事。押込一里塚跡碑を見る。平沢へ。軒並み漆器店が続き、漆器の町を実感。左の諏訪神社へ。奈良井宿へ。駅前の並木坂を上り二百地蔵。木曾大橋も見て宿舎へ。29日朝、宿舎の庭から上りにかかる。展望台では奈良井宿が下に見えた。上りが続き鳥居峠に着く。御嶽遙拝所、義仲硯石を見て下りに。藪原神社に寄って藪原宿に下る。木曾川の流れ見て昼食。義仲館を見学。宮ノ越宿から、更に足を延し原野駅へ。

(贅川→原野 22.6Km : 平 22年 5月 歩く)



25日朝、参加者6名で原野駅を出発。すぐ中山道中間地を見る。福島関所の門と番所が再現。興禅寺を見学。看雲庭は枯山水として見事。木曾義仲の墓も見る。途中で右に御嶽が現れた。木曾の棧は対岸に。上松宿へ。寝覚めの床は明朝とし、ホテルに入る。翌朝、出発。寝覚めの床に着く。木曾川に広がる奇岩は、国の名勝で迫力。慎重に戻り宿舎を出発。広重、北斎も描いた小野の滝は迫力の光景。萩原の一里塚も過ぎ、右に木曾川の溪谷を見て進む。須原宿では道々水舟が置かれ、杓で湧き水が飲める。定勝寺、天長院も過ぎ野尻駅に着いた。

(原野→野尻 33.7Km:平22年6月歩く)

24日朝、参加者12名で野尻駅を出発。山が険しく迫る木曾川沿いに行く。十二兼駅、南木曾駅を通過。巴御前の袖振り松、義仲甲観音と過ぎる。妻籠宿の町並みは昔の宿場風景を残す。更に大妻籠宿まで歩き宿に入る。翌朝、大妻籠宿を出発。風景は一変。鬱蒼とした道に行く。男滝、女滝を通過。一石榎茶屋では、お茶を馳走に。ご主人の木曾節で盛り上がる。馬籠峠に着く。長野、岐阜の県境。恵那山が前方に迫る。馬籠宿は木曾十一宿の南端。昔風な町並みも賑わいも妻籠宿に負けていない。宿を出ると石畳の道。「是より北、木曾路」の碑に出会う。落合の石畳を下って、医王寺、落合本陣跡を過ぎ、旭ヶ丘公園から間もなく中津川駅に着いた。

(野尻→中津川 31.9Km:平22年9月歩く)

**美濃路** 美濃路は十三峠、琵琶峠と御嵩宿まで山中の道。関が原を越え近江路へ。

29日朝、参加者10名で中津川宿を出発。脇本陣、本陣跡と宿場風の町並みを見る。駒場の高札場跡、小石塚立場跡碑と過ぎる。甚平坂の上に広重の絵碑。関戸一里塚へ下る。柳形の角に大井本陣の建屋。宿舎に着く。翌朝、恵那駅から中山道へ。商店町に宿場風景。西行塚から十三峠が始まり、紅坂一里塚、深萱立場跡を過ぎて終わる。眼下には大湫宿。神明神社の大杉は見事。ここからは石畳の琵琶峠へ。最高点に和宮歌碑。琵琶峠を下る。弁財天の池、奥之田一里塚を過ぎ、細久手大黒屋に着く。31日朝、宿を出発。峠道を上がると石仏を祀った秋葉三尊。鴨之塚一里塚は南北にずれあり。物見峠を過ぎると一杯清水。謡坂では近年キリシタン遺跡発掘で、マリア像を新設。牛の鼻かけ坂を下る。国道近くに和泉式部の供養塔。国道を直進左折。御嵩宿に入り宿場風町並みに。本陣、脇本陣みたけ館を見学。御嵩駅は近かった。

(中津川→御嵩 41.2Km:平22年10月歩く)

25日朝、参加者6名、願興寺を見て出発。伝説ある鬼の首塚も過ぎ、顔戸城址で昼食に。長い太田橋を渡り左折。堤防上の道から太田宿。祐泉寺には北原白秋、芭蕉、坪内逍遙の歌碑が立並ぶ。本陣、脇本陣見て宿舎元禄荘に着く。26日朝、

太田宿を出発。芳春院、深田神社に寄り、木曾川の堤防を進む。岩屋観音を過ぎ国道を下る。トンネルを潜り左へ風景は一変。自然林の山道が開け鶴沼の森。うとう峠一里塚へ。鶴沼宿の脇本陣で昼食。衣裳塚古墳、六軒一里塚へて那加ホテルへ。27日朝、那加を出発。新加納一里塚を過ぎ、少林寺、手力雄神社に寄る。細畑一里塚跡から加納宿。鏡島弘法から小紅の渡しへ。本物の渡し船で長良川を対岸に渡る。渡し賃は無料。土手の階段で昼食。堤防から橋を渡る。河渡橋から河渡宿へ。延命地藏尊、本田代官所跡と過ぎ、美江寺駅へ。美江寺の神社と観音堂を見て置く。

(御嵩→美江寺 47.7Km:平 22年 11月歩く)

26日朝、参加者7名で美江寺宿を出発。神社、観音堂から道は左折。鷺田橋で揖斐川を渡る。和宮記念小簾紅園へ。秋葉神社で昼食。赤坂宿では港跡、本陣跡、照手姫井戸を見る。相川の河川敷で鯉のぼりが見事。垂井宿へ。垂井の泉、一里塚は注目。関ヶ原宿へ。27日朝、宿を出発。関ヶ原戦跡、常盤御前の墓、今須峠と県境を越え、夢物語の里へ。

**近江路** 近江は豊かな自然と歴史文化を持ち、交通の要衝でもある。三条大橋は目前に。

楓並木が続き柏原宿。本陣跡、伊吹堂亀屋を見て、茶屋御殿跡で昼食。一色の一里塚から醒井宿。居醒の清水、十王水と綺麗な川が宿を流れる。久礼の一里塚は実物。番場宿からタクシーで宿へ。28日朝、番場宿の蓮華寺で北条仲時一行の墓を見て、擡針峠へ上る。下りは樹林帯の山道で少し山屋気分。鳥居本宿で神教丸本舗に寄る。小町塚から新幹線の下を潜る。高宮宿で多賀大鳥居、本陣跡、円照寺と過ぎ、道々には松並木が点在する。伊藤忠兵衛旧邸跡で休憩。豊郷を延長、愛知川駅に着く。

(美江寺→愛知川 55.6Km:平 23年 4月歩く)

21日朝、参加者8名で愛知川駅を出発。御幸橋を渡る。五個荘では近江商人屋敷を3軒ほど見て廻る。龍田神社で昼食。老蘇の森に奥石神社を訪ね、秀吉ゆかりの東光寺にも寄り、武佐宿の宿へ。22日朝、宿を出発。本陣跡を過ぎ、住連坊首洗池を見る。日野川を渡り、鏡神社、義経元服池、平家終焉地を訪ね、道の駅で昼食。守山宿、慈眼寺、大宝神社をへて草津宿の宿へ。23日朝、宿を出発。草津から中山道は東海道と合流。旧東海道の標示を多く見る。草津本陣跡、野路の一里塚、野路の玉川も過ぎ、瀬田の唐橋を渡る。琵琶湖が眼前に広がる。石山駅で昼食。途中、右に膳所城址碑。木曾義仲と芭蕉が仲良く眠る義仲寺に寄る。左に大津事件碑を。間もなく大津駅に着く。

(愛知川→大津 43.8Km:平 23年 5月歩く)

**京路** 近江と畿内の国境、逢坂は要衝地。中山道もいよいよ大詰め。終点の三条大橋へ。

24日朝、参加者12名で大津駅を出発。先ず関蟬丸神社へ。平安の歌人蟬丸を祀る。次に蟬丸神社上社へ。ここで昼食に。上り坂が続き右に逢坂の関碑を見る。月心寺を過ぎ、歩道橋を渡ると静かな山科の町。左に五条別れ道標。右へ天智天皇陵にも寄る。左の細道へ入る。日の岡集落へ。左に日ノ岡峠の車石を見る。三条の道に合流する。白川橋も過ぎ、三条大橋に着く。中山道を完全踏破。高山彦九郎像の前で横断幕を広げ、芹沢リーダーを中心に、仲間の喜びの顔と顔が一枚の写真に収まった。

(大津→三条大橋 11.8Km : 平23年6月歩く  
(日本橋→三条大橋 537.2Km)

参加者 (参加いただいた方々)

○芹沢 熊谷 祖父川 澤野 飯島 小池 西口 岩方 御園 依田 今井  
柴野 佐々木 和久田 足立 青柳 花島 中村 竹尾 和智 福田  
戸野部 今泉 木村 長谷川夫妻 井上夫妻 佐藤夫妻 茂木夫妻 計32名



京都三条 高山彦九郎像前で 2011・6・24

# 数字で見る中山道

御園 培博

芹澤支部長による横浜支部始まって以来の大型企画『街道を歩く(中山道)』は、平成20年9月27日に始点となる日本橋を出発し、本年6月24日、全行程537.2kmを踏破し、無事、京都三条大橋に到達しました。この間、日程的には、東日本大震災等によるやむを得ない事情により若干の変更はありました。しかし、これによって、支部創立55周年という記念すべき年に完了しましたので、本号「羊齒」には、茂木会員による詳細な報告文が掲載されております。小生もなにか「羊齒」に投稿しなければと考えた結果、題字にある方法で拙文をまとめることにしました。数字の羅列ですので、あまり面白くないかもしれませんが、文頭で書きましたとおり、支部始まって以来の大型企画でしたので、「羊齒」記念号に相応しいかと思っております。

## 記録

- 中山道 江戸日本橋～京都三条大橋
- 宿場 69宿 総距離 537.2km (山溪発行の書による)
- 参考記録 (以下、支部会報の計画及び報告文から抜粋)

\*実施回数 20回 (日帰り…9回、一泊二日…7回・14日間、二泊三日4回・12日間)

注…最終回は、一泊二日の日程でしたが、一日目に京都三条大橋に到達し、翌日は自由行動としておりましたので、本編記録では、日帰りとして処理しております。

\* 実質歩行日数 合計 35日間

\* 参加延人員 398名 一日平均 11.4名

\* 最多参加日 第3回 平成20年11月29日  
上尾宿～鴻巣宿 19名

\* 最小参加日 第17回 平成22年11月25日～27日  
御嶽宿～美江寺宿 6名

\* 1日歩行距離 (書による規定の宿場間の距離)

最長区間 第17回 2日目 <sup>うぬま</sup> 鵜沼宿～加納宿 24.5km

最短区間 第13回 1日目 <sup>にえかわ</sup> 贅川宿～奈良井宿 7.3km

- \* 参加者全員の歩行距離合計 6,023.4 k m
- \* 参加者一人・一日あたり平均歩行距離 15.1 k m
- \* 全行程の総所要時間（現地で歩行開始の時間から終了までの総計）  
223 時間（歩行・休憩・参拝・見学など）  
一日あたり平均時間 約 6 時間 20 分

\*注釈

以上が総体的に見た数値です。昔「中山道」を歩いた旅人たちは、ほとんどが「江戸」から「京都」まで通して歩いたと思いますが、私たちは 20 回に分け、その都度、自宅を基点に中山道まで往復しました。その部分は、統計上余分なことです。上記数値には含めておりません。

これが現代の街道歩きの姿でしょう。日帰り、一泊二日、二泊三日と部分別に見ますと、それぞれに特徴が見えて来ます。例えば、日帰りであれば、季節に合わせて一日を目一杯、有効に使用しましたが、回数を重ねるにつれ、歩き始めの鉄道駅までと更に歩いた分だけ復路も遠くなるため、群馬県から碓氷峠を越え長野県に入る時点から一泊二日の日程となり、更に、妻籠から馬籠の間で長野県・岐阜県の県境を越え中津川宿に着いた際は、往路及び復路の鉄道利用分が長く、初日の歩行時間が 5 時間 10 分、二日目は帰宅時間を考慮して、早めの切り上げで、歩行時間は 6 時間 10 分と上記平均値を下回っております。その後、二泊三日の行程となり、これによって中日が最も効率がよく、7 時間から 8 時間と長時間歩行が可能となり、16 回及び 19 回では、それぞれ 19.6 k m、17 回では 24.5 k m を一日で走破しております。

- \* 中山道は、徳川家康が江戸に幕府を開いた際、京都との往還のため東海道を開設したが、大河が多く、大雨などによる川止めなど不都合なことから、新たに開設したもので、特に山間部を経過地としていることから、峠道や坂道が数多くあり、現代ではとても新道とは認めがたい感じでした。そこで、私たちが歩いた峠や坂道を列記してみます。
- \* 碓井・瓜生・笠取・和田・塩尻・鳥居・馬籠・十曲・広久手・甚平・十三峠・槇ノ根・平六・紅坂・乱れ坂・三城・茶屋・権現・檜ノ木・琵琶（600 m の石畳）・秋葉・鴨の巣・物見（御殿場）・謡坂・牛の鼻欠・うぬま・今須・車坂・摺針・逢坂・日の岡・・・etc これらの他、名称の無い峠・坂道多数。
- \* 利用した私鉄 名鉄線、樽見鉄道、近江鉄道
- \* さて色々と数値を並べてきましたが、最後に皆さんが一番興味を示す数値を発表します。（この金額は、私個人が使った金額です。）

\* 費用総額 交通費（JRのみ、私鉄はその他） 223,830円（注）  
 その他（宿泊、飲食、参観料など） 216,311円  
 合計 440,141円

（注）この金額は普通運賃に戻した金額・ジパング使用は3割引になります。  
 さて、最後になりましたが、上記の膨大な計画を策定された『芹澤支部長』さんは、大変なご苦勞をされたと思います。お蔭様で、全コースを完歩することができました。紙上をかりて心から感謝申し上げます。有り難うございました。



鴻之巣一里塚 （第3回 平成20年11月29日 上尾～鴻巣）  
 撮影 芹沢隆久



中山道全69次のうち第31番 洗馬宿 歌川広重  
 （第12回 平成21年11月28日 洗馬宿千倉屋泊）

# 日本百名山完登

金本 勲

日本百名山の深田久弥は石川県加賀市の生まれである、脊椎カリエスの病弱な北畠美代さんを妻にして、ある時は北畠さんを背中に負ぶって鎌倉の浜辺を散歩したりしてやさしい人であった。しかし20年振りに初恋の人木庭志げ子さんと再会して間も無く再婚した事を考えると善し悪し別にして、女性に対しても山登りに対しても情熱的な人間である。

深田久弥が山登りを始めたのは小学校6年に江沼富士に登ってからである。若い頃に日本の百の山をリストアップして自分の足で山登りして紀行文をかき始めた。それが日本百名山である。

私は深田久弥の山に対する情熱そして選定された日本百名山の写真を見て益々日本百名山に魅せられた。私は21歳から山登りを始めた。会社の山岳部に入部したが当時は残業・臨出が多く5月連休・夏休み位しか山登りが出来ず定年退職してから本格的に登山を始めた。退職後暫らく川崎市中原に事務所があるハイキングクラブに入会して日本百名山を目指したがなかなか自由が利かず、新ハイキングクラブ横浜支部に入会したのが平成10年夏である、入会の挨拶で日本百名山を目指している話をした。私が入会した時迄に八幡平・岩木山・八甲田山・槍ヶ岳・穂高岳他日本百名山を踏破したのは16山のみです。入会2年目平成11年に剣岳・立山・安達太良山・日光白根山4山登ったが当時日本百名山完登者また目指している山仲間が少なく、自分で百名山山行を計画して登らなければ完登出来ないと思い、平成12年から百名山主体の個人山行を計画して平成12年には8山登った。平成13年には個人山行に更に支部山行を自分で計画して係りをやり、百名山を増やして10山登った。平成18年迄76山踏破して残り24山ラストスパートかけ、平成19年は北海道羅臼岳・斜里岳・雌阿寒岳・幌尻岳・十勝岳・深田久弥の地元白山そして四国2山等19山を踏破して残り5山の百名山目の後方羊蹄山を平成20年8月3日に完登した。

日本百名山完登では楽あり苦ありです。九州九重山は単独行でしたが台風に会い、地図と磁石を片手にやっとの思いで下山した。また御嶽山では1日目は八合目女人堂で泊ったが翌朝に雪が降り風もあり登頂をあきらめてそのまま引返した。その時に強行した別のグループの1人が遭難死した。そして白山～荒島岳山行でも2日目に風雨が強くなり白山だけの山行で終わった。一方一番楽しい山行は平成18年踏破

した屋久島宮之浦岳です。屋久島は年間 365 日雨が降ると言われているが 4 日間の山行で雨は全然なくレンタカーを借りて島内観光した。ヤクシマサル・ヤクシカにも会い、樹齢 1,000 年以上の縄文杉や夫婦杉を見たり、海岸の温泉風呂に入りお勧めの山行でした。尚日本百名山完登の後方羊蹄山では山頂で祝日本百名山完登の横断幕を掲げて横浜支部他の方々に祝って頂いて一生の思い出です。

私のモットーである安全登山に徹して、山行仲間に誰一人怪我人もなかったのは誇りです。日本百名山完登出来たのも先輩たちの指導・協力また同じ百名山完登を目指していた山仲間の御蔭だと感謝しています。ありがとう。

#### 深田久弥の日本百名山完登記録

踏破年月	山 数	山 名
～平成 10 年	16 山	八幡平、岩木山、八甲田山、磐梯山、燧岳、
		至仏山、白馬岳、槍ヶ岳、穂高岳、霧ヶ峰
		甲武信ヶ岳、丹沢山、阿蘇山、大菩薩岳、乗鞍岳、富士山
平成 11 年	4 山	劔岳、立山、安達太良山、奥白根山、
12 年	8 山	天城山、九重山、会津駒ヶ岳、黒部五郎岳、黒岳
		鷲羽岳、雲取山、那須岳、
13 年	10 山	常念岳、開聞岳、霧島山、金峰山、鳳凰山、
		北岳、間ノ岳、塩見岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳、
14 年	6 山	鳥海山、八ヶ岳、五竜岳、鹿島槍岳、蔵王山、月山、
15 年	4 山	朝日岳、木曾駒ヶ岳、空木岳、祖母山、
16 年	11 山	男体山、赤城山、利尻岳、雨飾山、聖岳、
		光岳、谷川岳、四阿山、焼岳、笠ヶ岳、蓼科山、
17 年	3 山	飯豊山、赤石岳、悪沢岳、
18 年	14 山	筑波山、伊吹山、両神山、大峰山、大台ヶ原山
		巻機山、岩手山、薬師岳、トムラウシ、大雪山
		皇海山、瑞牆山、吾妻山、宮之浦岳、
19 年	19 山	大山、恵那山、高妻山、早池峰、御嶽、
		魚沼駒ヶ岳、平ヶ岳、羅臼岳、斜里岳、阿寒岳、
		草津白根山、幌尻岳、十勝岳、火打山、妙高山、
		白山、剣山、石鎚山、武尊山、
20 年	5 山	浅間山、苗場山、美ヶ原、荒島岳、後方羊蹄山、



# 心に残る 100 名山

服部 八重子

北海道の山は特に心に沁みます。はるか遠くまで来たという連帯感でしょうか 2008 年 8 月、後方羊蹄山をめざし 4 名の猛者が羽田に集合する。もうそこから心が躍る。どんな山だろう！どんな旅が待っているのだろう！

列車を乗り継ぎ今日の宿、比羅夫に到着。何か良い匂いがしてきた。なんと駅構内でバーベキューの最中！ 早速、私たちの食材が配られて仲間に入る。

この肉は私の、ピーマンはKさんの、と口角泡をとぼしてのビールは美味しい。列車が入ってきた。“一緒に飲みましょう！”とビールをかかげると、列車の乗客はニコニコと手をあげて過ぎていく。札幌から 5 時間かけて友が駆けつけてくれた。

次のステージがお待ちかねです。お腹が一杯になったらお風呂でしょう！駅舎の脇に大きな木をくり抜いた長さ 2.5m ほどの風呂がある。あまり深くない。一人ずつ入って記念撮影開始！見えたの见えないのと大騒ぎ！ログハウスの宿でも話が尽きない。

4:00 友の車で出発、4:30 登山口、10:30 頂上。アイヌ語でマッカリヌプリ。美しいコニーデ型で、火口が見えるはずが下から吹き上げる風と雨が足元をゆらす。“人生甘くない” 1 年後富士山でゴール！（又、雨 人生めげない）北海道から駆けつけてくれた友や浦和支部の方と、にぎにぎしく頂上に立ちました。沢山の仲間に支えられ思い出ぎっしり詰まった 100 名山達成でした。



空木岳に向かう筆者

## 仙人池、裏劔岳縦走 2010.9.17～20

飯島 和子

横浜駅西口を夜行バス 22：50 発に乗り出発した。このコースへの想いはかなり以前からあったが、ギリギリの年齢に達してしまった。今こそ行かなければならないという思いにかられ実行に至った。

室堂は小雨で、雨具を付け、軽い朝食の後出発した。一時間歩いたところで、晴れて気温も上がり、まわりの景色や登山道の花々に会え元気をもらう。劔沢小屋は、以前泊まった場所に、今年完成した真新しい木の香りのする立派な建物になり、収容人数も 120 名。私達は 10 名の部屋に 3 人でゆったり休むことが出来た。

朝食後出発。劔沢雪渓を下る。残雪の下に氷も張っている。登山者はほとんど劔岳へ向かう。先行する単独行の女性ひとりだけ。昨夜小屋の主人から崩落した個所を聞く。ペンキ印やケルンを確認し快適に下る。対岸に聳える岩峰群を見乍ら、一歩一歩進める。真砂沢ロッジを過ぎ二股で吊橋を渡ると仙人新道に入る。

急登の連続だが八ツ峰、三ノ窓雪渓に癒されながら仙人峠に着いた。ヒュッテは近い。仙人池から八ツ峰の岩峰が鏡のように写る姿を確かめに急ぎ足だ。荷を置いてその景色を見る。晴天なのでまるで絵に描いたように池に写る。劔岳の穂先が八ツ峰の後方に見える。かなり距離があるのに不思議な場所だ。この景色を見届ける為の登山であった。名物志津ばあちゃんも元気で迎えてくれた。従業員と共に山小屋まで往復ヘリコプターで運んでもらうとの事。風呂で汗を流した。高所で贅沢なことだと感謝する。

次の日も晴天。仙人谷の沢底へ大きく下り、仙人温泉、雲切新道を歩いていくと、白馬岳から鹿島槍の展望が広がる。雄大な景色だ。登山道は次第に急な下りとなりリッジ状の尾根をロープ、ハンゴ、鉄橋で通過、なおも進むとはるか下の方に黒部の流れが見下ろせるようになる。阿曾原温泉小屋は近い。以前、下ノ廊下を歩いたことを思い出す。温泉へ行くと、地元富山の山岳部の人達と話がはずむ。その後一緒に『山の唄』を歌う。楽しい夜が更ける。最終日、水平歩道を樺平へ向かう。オリオ谷をトンネルで通過、奥鐘山の西壁が迫力ありすばらしい眺めだ。志合谷をヘッドランプを付けて歩く。水平歩道は、日本電力により黒部電源開発のために深く切れ落ちた断崖に作られた道である。人の力は偉大だ。

富山駅で風呂に入り、その後夜行バスで横浜駅へ。永年の想いが叶った充実した山旅であった。

## 山行報告 「白銀山」

齋藤 郁夫

山のベテランが数多く在籍しておられる当支部でも「白銀山（しろがねやま）」の名称だけでは、この山に関する情報の保有者、まして踏破(?)された経験者は極めて少数ではないかと思っております。名前は立派ですが箱根の外輪山の南部の地味な山で、標高も993M、手許の昭文社の「箱根」(2004年版)では箱根湯本からと畑宿からのルートが破線で記載されており、2.5万の地図にも山名と三角点のみで、ここ3年ほど前までは私が入手し得た情報では、猛烈な藪山で一部のマニア以外には相手にされない「秘峰」的な山でした。最近のインターネットの普及でこの山に関する最新情報が容易に入手出来るようになり、物好きで変態的(?)な山歩きを目指している私の標的の山のひとつとなり、挑戦の機会を伺っておりました。幸いにも支部員の中で同好の士(?)が見つかり2011年の年明けに無事登頂することができましたので、下記の通り報告します。

小田原駅よりタクシーでターンパイク道路を山頂直下まで入り、星ヶ山経由で、自鑑水、幕山へ出て、鍛冶屋からバス利用で湯河原駅へ出ました。歩数計によれば約26000歩、休憩を含み行動時間7時間30分を要しました。

白銀山への入り口は標識が無く分かりにくい(玉川学園演習林の看板が目印だがそのサイズが小さく、草に隠れている)が、コースに入れば藪も無く歩きやすい道で拍子抜けした感じで山頂着。山頂は標識と三角点のみで展望無し、畑宿への道も入口は不明、道なりに東南に下ると小さな広場、さらに下ると湯本と弾正屋敷跡へと標識があり、矢印がその方向を指しているが湯本以外には道は無く、その道を辿りターンパイクへ出る道を探すも見つからず先程の標識の場所に登り直し戻る。久しぶりにコンパスと地図を活用し相談後、目前の藪へと意を決し突入。薄い踏み跡、獣道らしきところを下り小さな沢(水無し)を下ること約30分弱でターンパイクに飛出す。ターンパイクを小田原方面に約200M歩き右に星ヶ山への入り口を見つけるもここにも何の標識も無し。緩い気持ちの良い道を辿り弾正屋敷跡の明るく開けた場所を経てゴルフ場の一角に出る。ここまでの道は白銀山からの藪の下りと比べれば正に天国の感じで、ゴルフ場の施設のベンチとトイレを有難く利用させていただく。再び尾根に取りつくのが、背丈を上回る箱根竹が密生し、足元も不安定で道幅も狭く前から人が来たら擦れ違いに相当苦勞する程。加えて動物捕獲用の針金式の罠が2ヶ所も仕掛けられており、幸いにもストックが反応して実害は無かった

が挟まれたら大変なことになる。せめて赤い布でも付けておいて欲しい。暫く進むと作業中の地元の男性に出会い、星ヶ岳山頂への入口を確認し山頂に立ち寄る。周囲の藪で展望は楽しめず残念至極。三角点の周りだけが約2M角に切り開かれている奇妙な山頂だ。尾根道へ戻り相変わらずの密生した箱根竹の道を只々下り続ける。途中には急傾斜もあり手強いコースだ。ようやく片斜面が植林地になり昼食とする。更に下ると尾根筋がきれいに切り開かれており、これをそのまま登るのが正しいと思える斜面に出たので、疑うことなく登り切ると完全に行き止まりの密生した藪。テープも踏み跡も見出せないで、登り始めた地点に戻ると右側の箱根竹の藪に赤テープが1M弱の幅でつけられており（このテープには先頭の私は気が付かなかったが、他の2人は気づいていた由）掻き分けてみると足元が踏まれておりコースと判断して緩い傾斜を下る。やがて藪を抜け出して、昔は車が入れたと思える荒れた感じの未舗装の林道に出て、周囲も開けた場所となっており、ホット一息をつくことができた。方角で見当をつけてこの林道を右に登り、緩く下るとようやく標識があり、直進すれば南郷山、右へ下れば自鑑水と記されており一安心。以降は特に問題となる箇所もなく水平に近い山道を小さな池というより水たまり状態の自鑑水を経て、風が強まって来て寒い幕山頂上に到着。朝から歩いてきた白银山～星ヶ山の稜線を眺めて感慨にふけり、海側の真鶴半島、初島、大島、天城連山などの眺めを楽しみ、紅梅、白梅の蕾がほころび始めた幕山公園に無事下山した。

箱根の一角にまだこのようあまり人が立ち入らない、標識が殆ど設置されていない山城が残っていたことは私にとっては大変嬉しいことであったが、地図を読む能力の欠如と事前の情報収集力の不足を強く反省させられた山歩きとなった。

物好きな山行にご一緒いただいた同好の士のお二人に感謝！！

なおこのコースを逆に辿ることはお勧めできない。インターネットには逆に星ヶ山に登りターンパイクから私達が下りてきた場所から沢を辿って白银山への報告も見られるがそれなりの体力と能力が要求される手強いコースとなるからだ。  
実施年月日：2011年1月5日

コースタイム：白银山入口7:40 山頂8:10（引返し後）9:10 ターンパイク

9:40 星ヶ山への入り口 9:55 弾正ヶ原 10:30-45 ゴルフ場 10:55-11:10

星ヶ山 11:25-30 林道への入り口 13:10 林道 13:30 自鑑水 13:50

幕山 14:15-30 幕山公園 15:00 鍛冶屋バス停 15:20

メンバー：飯島 和子、小澤 勝太郎、齋藤 郁夫

## 語り部と歩いた熊野古道三日間

湯浅 克枝

見渡す限り雲海が広がっていた。その雲の上で、機は静止しているように見える。こんな光景を絶好の飛行日和とでも言うのだろうか。雲の上に頭を出した富士山が窓際に見えて、ゆっくりと後方に去って行った。飛行していることを実感する。

一度は熊野古道を歩いてみたいと思っていたが、平成22年11月5日～7日。やっと実現の日が来た。南紀白浜空港には予定どおり、一時間ちょっとで着いた。バスで「熊野古道館」に向かう。バスが到着すると、中年女性の「語り部」が待って居た。早速古道館の資料などについて案内してもらおう。古道館の前の道路の向こう側には、「滝尻王子」を祀るお宮がある。熊野99王子の中でも特に格式が高く、熊野霊域の入り口の重要な場所に祀られているのだと言う。今日はここからバスで、「牛馬童子」の入り口まで移動し、「野中の清水」まで歩きます。

杉木立の古道は一般によく整備され歩き易い。一キロばかり歩いた所が「箸折峠」で、峠の由来は、花山法皇が、箸にするためカヤを折ったと言う逸話による。その時、見ていた一人の王子がカヤの軸が赤いのに驚き、「血か、露か、」と尋ねたので、以来「近露王子」と言うことになったそうです。

峠を右へ少し行き、石段を数段登った所に、中辺路のシンボル、牛と馬の背にまたがった「牛馬童子像」がある。

峠の道に戻り、急に視界が開け下りになる。途中で東屋とベンチがあり、集落が見渡せ、休憩に良い場所でした。ここを下り、集落の中の一般道を歩く。日置川の北野橋を渡った左に、前述の近露王子の碑がある。民家の軒先では、季節の果物や草餅などを売っていた。ちょっと覗いて挨拶を交わすのも楽しいひとときです。鬱蒼とした杉木立のお宮、「縦櫻王子」に着いた時には、短い秋の夕暮れが近づいていました。歩き始めてから約6キロの道のりだった。境内の樹齢千年の大杉は、那智山の一方向に枝が延びるので、一方杉と言う。大人6人で囲む太さがある。境内を出たところには、茅葺き屋根の「とがの木茶屋」がある。この日はあいにく休みだったが、古代米の団子・コーヒーなど、予約すれば、紀州郷土料理や茶粥などが味わえるそうです。

茶屋からすぐの場所に秀衡櫻がある。奥州秀衡がこの地を旅した時、奥方が赤子を産んだが、旅の困難を思い、赤子をこの地に託した。無事の成長を祈り、持っていた

櫻の杖を地面に挿した。やがて根付いた櫻は、立派な花を咲かせるようになったそうです。秀衡櫻・縦櫻王子の由来と言われる。

「野中の清水」は、この下の旧国道沿いにある。民家の境界線のあぜ道を失礼して近道をさせてもらう。今も昔も、旅人の喉を潤す名水百選の湧き水は、絶えることもない。ボトルを手に水を汲みに井戸に降りる足元が、もう薄暗くなっていた。野中の清水を後に、一路「みなべ温泉」のホテルに向かう。みなべ温泉は白浜より北寄りだから来た以上に戻ることになる。一日目の終わりは、少し慌ただしかったが、たくさんの楽しい思い出を残してくれた一日でした。



23 番道標附近の熊野古道

提供 筆者

# ヒマラヤ・マウンテンフライト

祖父川 精治

今は、マウンテン・フライトの楽しい思い出となったボーディングパスを手にし  
ている。

大きなヒマラヤ小さな王国で知られた、ロイヤルネパール・エアーライン（RN）  
の搭乗券で、席順は5Aと印されている。米国ボーイング社のB727、昔、大活  
躍した花形ジェット機でアメリカや日本では既に引退した機種である。専ら発展途  
上国で、内外幹線用として現在も就航している。

座席は横6席A～Fを、通路側CDを除く窓側のAB、EFを使用する。誰しも  
AかF、そして主翼上の席は避けたいと思う。搭乗券の配り方が面白い。グルー  
プ毎に席を区切り、搭乗券を裏返しにしてトランプのように各自に引かせるので公  
平といえる。以前は先着順であったという。最後に残ったものを取ると最良席順で  
ある左側の5Aであった。

✦

ネパールの首都カトマンズ、5ツ星の最高級国際観光ホテル「エベレスト・ホテ  
ル」。朝6時、送迎用ハイヤーのベンツが待っている。私たち4名がゆったりと座  
って、トリップバン空港国内線乗り場へ運んでくれる。

空港には、プロペラ機や大型ヘリコプターが駐機している。マウンテン・フライ  
トや国内線は山岳飛行のため天候に左右されることが多く、また予約システムに多  
少問題があるといわれる。このマウンテン・フライトは世界的規模で人気があり、  
日本出発前に旅行代理店を通じて申し込み、現地では悪天候のため延期され2日間  
も待ってやっと実現したものである。

手軽に世界の屋根ヒマラヤ8000メートル級の巨峰群13座中の6座を、間近に望  
む迫力のある山岳展望飛行である。

エベレスト（現地名サガルマータ）	8848メートル
カンチェンジュンガ	8598メートル
ローツエ	8511メートル
マカルー	8481メートル
チョオユー	8153メートル
シシヤパンマ	8013メートル

✦

無風快晴、空気の澄んだ早朝にフライトする。海拔1300メートルのカトマンズ空港を飛び立ち、盆地周辺の赤茶けた2500メートルの山々を越える。約15分で厚い雲海を抜け高度7000メートルの水平飛行となる。

行きは左側のAB席から、窓一面に冰雪輝く偉大なヒマラヤ巨峰群の展望が広がって行く。東斜面は柔らかな朝の光を受けて明るく、見下ろす長大な氷河や碧い氷河湖、無数に刻まれたヒマラヤ巒と呼ぶ冰雪の懸崖やアイスフォール。数限りない冰雪の峰々が聳え、土地の人びとが崇拝する白き神々の座である。

カメラ2台と双眼鏡、この目に刻み残そうとしっかり眺め続ける。マウンテン・フライト用のパンフレットを参照に、同乗のパーサーが巨峰の形を手で示して山名を教えてくれる。

特にカニの爪状の双耳峰ガウリシャン・カール7146メートルは直ぐ確認同定できる。私たちはつい一昨日まで、この山を近くに仰ぐ4000メートル峰を登って来たのである。



我々のパーティーは、日本各地から集まった男女15人とトレッキングツアー社添乗員1名。現地スタッフは「(チーフサーダー、案内、テント設営、10人)(コック、キッチンボーイ、5名)(ポーター30名)」ポーターは現地の村人を雇用、全ての荷物を背で運搬し中には若い女性も加わり隊列はミニ遠征隊風である。

チーフのみ英語を話し片言の日本語も使う。全て英国風マナーなので、食事や3時のティータイム用にテーブルと椅子を人数分全て運ぶ。トイレット・テントも設営。コック達は先行し、休憩時には熱い紅茶と甘いクッキーが出る。

私たちのことは、サーブ「ご主人様」と呼んでくれる。朝、テントへお湯の入った洗面器を「グット・モーニングサー」といって運び後、紅茶が来る。腹ばいのままで顔を洗いお茶をすする。

テントは2人1張りが基本であるが、自由にしたいので割り増し金を支払い1人単独で使用する。自由気ままに眺望を楽しみカメラを手に、そして軽いザックを背負って歩く。昔、重装備で南アルプス縦走した時の苦しさ辛さは夢のようである。



私たちの行った5月はネパールの夏で、標高3000メートル圏内ではヒマラヤシャクナゲの最盛期。森林限界は3500メートル、石のゴロゴロした岩稜となりフサフサした長い毛が暖かなそうなヤクの草を食む姿を幾度か見る。5000メートルを超えるともうそこは冰雪の世界となる。6月から9月までがモンスーン期と呼ばれる長い雨季となる。トレッキングやヒマラヤ登山、マウンテン・フライもこの期間は避けている。



2000年にも及ぶグレートヒマラヤ、中でも8000メートル級の巨峰群が集まるクンブ山群。中でも一段と高く三角形のエベレストが見えてきた。機内ではワット歓声が一斉に上がる。山を志す人たちが夢にまで見た憧れの最高峰、平成3年（1991）、今この難峰へ日本人登山隊が2組も登頂中であるといわれる。

帰国してからの情報では、中年サラリーマン2人組みが3ヶ月の長期休暇を利用してシェルパと共に登頂に成功したが、うちAさんは帰路転落し行方不明となった。またもう1組はB大学山岳部10名で、雪崩落石のため6500メートルで撤退したという。

1953年5月29日、イギリス隊がエリザベス女王戴冠式の前日に初登頂して以来、世界各国のサミッター数は平成22年（2010）現在3000名を超えたと伝えられる。今では気象条件が良ければ1日で十数人以上も登頂するような時代がきている。

富士山頂より高いチベットのラサ・ポタラ宮で登山家の野口健さんとご一緒に登ったことがある。この後、中国側よりチョモランマ（エベレストの中国名）へ清掃登頂する予定だと話していた。後日無事成功の報道があり。



右回りでUターンして帰途に着く。この時、幸運にも遙か遠くインド国境のカンチェンジュンガ群の威容が望まれる。機首の操縦席に近い席なのか、コックピットの扉を開放して操縦席内へ招き入れ正面からの広大な眺望を確認できた。カメラのシャッター3回押したらハイ交代となる。

帰路は右側EF席の人たちが楽しむ順番である。それでも頭越しに反対側の丸窓から次々と現れる峰々の眺望を楽しむことができた。

僅か1時間、夢のようなフライトの料金が米ドル払い条件で150ドル（約2万円）。ネパール労働者の平均年収の2年分に相当する額である。世界中から搭乗希望者が多いので、高額なものやむを得ないと納得する。

#### メモ

- ◎ 行きはキャセイパシフィック便、香港でロイヤルネパール便へ乗り継ぎ10時間、カトマンズへ夜着。帰りは夜行便でバングラデッシュのダッカ空港内で宿泊、イスラム国では待合室も男女別々である。香港乗り継ぎで成田へ計12時間。時差は3時間15分。
- ◎ ビザは入国ビザの他に、トレッキングビザが必要で許可証を常時携帯する。
- ◎ 「ナマステー」朝昼夜すべて、挨拶に使う。「ダンネバート」ありがとう。「ビスタリー」歩行中ゆっくりと歩くようビスタリー・ビスタリーと使う。この

国の人たち全体の生活習慣がビスタリー調といえる。

- ◎ 同行した友人の中で、ネパール山中へ学校の建設費用を寄付した、金額は約  
100万円。 平成3年（1991）5月の紀行

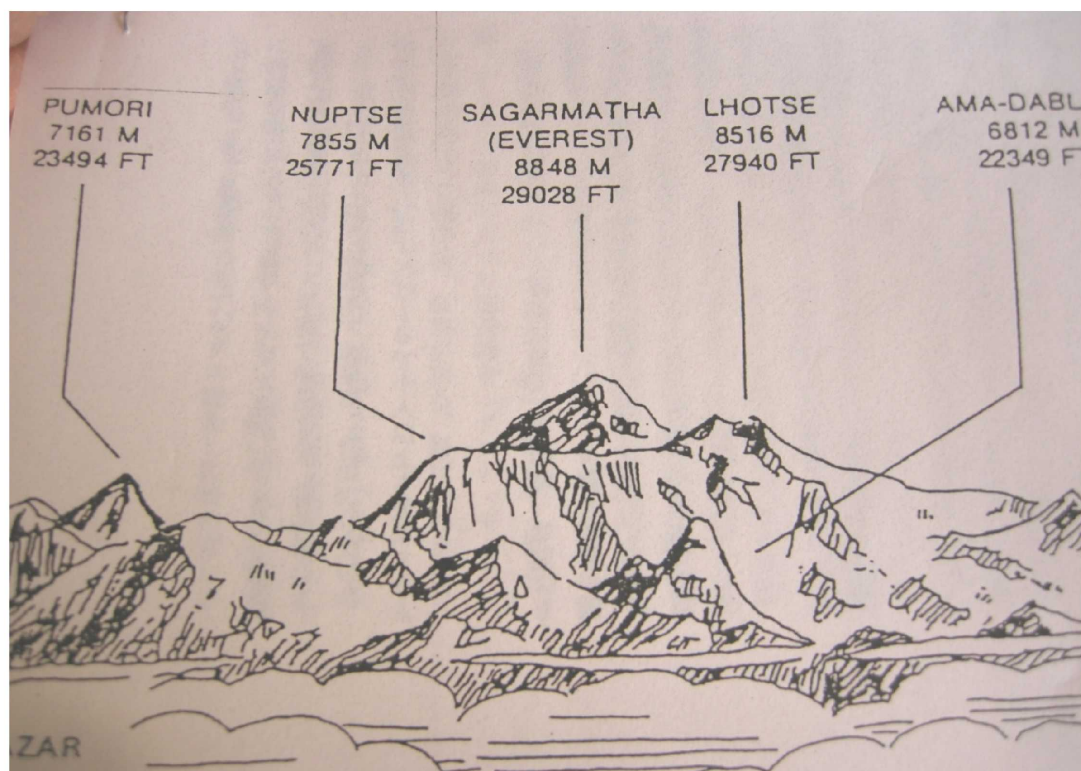


イラスト 筆者

## ペルー、クントウル・ワシ遺跡を訪ねて

細井 陽子

10年前の話になるが、職場の若い友人輝美さんから、「今年の夏ペルーに行きませんか」と声をかけられた。彼女の母方の祖父母は沖縄からの移民で、親戚がリマに住んでいるという。また、日系2世であるお母さんは、日本の大学の文化人類学（アンデス文明）の研究者としてペルーを訪れていたお父さんと知り合い、結婚したという。

その頃1年間スペイン語を勉強していた私は、いい機会とばかりに、もう一人のスペイン語クラスの友人を誘って、ペルー行きを即決した。

8月、輝美さんは甥を連れて先に行っていたので、2人で16時間+8時間の飛行機を乗り継いで、リマに到着した。疲れは感じず…（若かったなー）。

空港からホテルまでは、ガイドが案内してくれたが、次の日からは2人の手さぐり珍道中が始まった。タクシーは、行き先を言って値段を交渉する。フロントガラスが割れたタクシーにも乗った。ホテルでは、シャワーのお湯が出ないので、勇気を出してフロントに文句を言いに行った。すると、スタッフが調べに来て、赤と青の水栓が逆に取り付けられていることが判明。なんともおおらかなラテン気質(?)。

日系移民は勤勉さゆえにある程度の地位を築き、輝美さんの親戚もリマ市内の大きな家に住んでいた。しかし貧富の差は大きく、犯罪も頻繁に起きるとのこと、ブロックで一人のガードマンを雇い、24時間警備を頼んでいた。

前半は、2人でクスコ、聖なる谷の遺跡、マチュピチュを旅行し、再度リマに戻ってきた。

後半は、彼女のお父さんが中心になって発掘しているクントウル・ワシ遺跡を訪れる旅だった。

今度は名古屋からきている叔母さんと3人で、まず北部のカハマルカへ飛んだ。ここは、1532年、インカの最後の皇帝アタワルパがスペイン人に殺されたところだ。今は農業主体の高原リゾート地になっており、温泉(78°)が出るため、庶民の憩いの場である公衆浴場もあった。牧場見学の帰りには、普通のインディヘナの人々の暮らしを垣間見ることができた。特徴ある民族衣装(山高帽と幾重にも重なったスカート)を着た女性が農作業の帰りに子供たちと歩いている姿、町からの買い物帰りに縞の布を担いでいる姿、羊や牛の群れがいて車が通れなかったり…と、のどかな風景。実は、ここから目指すクントウル・ワシまでは公共交通手段が何もない。そのため、輝美さんのお母さんが用事を兼ねてタクシーで迎え

に来てくれ、1泊して次の日にまたタクシーで目的地に向かった。ガタガタの山道を走ること3時間半、山々を越えてついに100軒ほどの小さなクントウル・ワシ村に到着した。七面鳥やにわとりが走り回り、牛や馬が放し飼いにされている村の道を登っていくと、小高い丘があり、そこがクントウル・ワシ遺跡だった(標高2300m)。大きな階段の上には、ジャガーや蛇目をモチーフにした石柱が置かれており、丘からは海につながる川と、アンデスの山々が見渡せる。紀元前800年から1000年間くらいの間、ここに古代アンデス文明形成期の神殿があったという。なぜ海岸地方にあった神殿を放棄して移動してきたのかは、研究の重要なテーマとのことだが、青い空、雄大な眺め…。この地が古代神殿の建設地に選ばれたことに納得。

1988年から大学のアンデス文明調査団が発掘調査をし、何期かの時代にわたる神殿や墓を発掘してきた。発掘した神殿は調査の後、損傷しないようにまた埋め戻される。そこでは、日本とペルーの研究者たちが、地元の人々の協力を得ながら、新たなユネスコの事業による発掘・保存作業をしているところだった。

発掘で墓の中から発見された、有名な「十四人面金冠」(金冠に2段14ヶ所の窓があり、それぞれに人面がぶらさがっている)・「五面ジャガー金冠」などは、日本でも展覧会で公開されている。

1994年には、展覧会で集めた協賛金や寄付金をもとにして、村に小さな博物館が建設された。“発掘の成果をクントウル・ワシに返す”、“住民参加の文化財保護”という考え方で、博物館の運営・管理を村民に委ねていったのだ。

博物館は3階建てで、金製品の実物も展示されていた。住民が、受付、会計、清掃、記録等を自主的に管理することにより、自分たちの村の文化財を守り、村を発展させていく意識が養われている。遺跡の盗掘や荒廃が多いペルーでは、画期的なことである。

しかし、「アンデスの黄金：クントウル・ワシの神殿発掘記」(大貫良夫著、中公新書)を読むと、それが容易なことではなかったことがわかる。大貫先生のお人柄が、切り開く原動力になっていったと感じた。

最後の夜にはお別れのパーティーが開かれ、料理をいただいた後には、ギター・打楽器・歌に合わせて陽気なダンスが始まり、夜中まで続いた。ペルーの文化に触れ、人々と交流したこの旅は、忘れられない私の財産である。



## 南蛮の巡礼 (スペイン・サンチャゴ巡礼)

小澤 勝太郎

今年 2011 年 5 月 31 日成田空港から、自転車の搬送費が無料の英国 BA 航空に 26 インチ折り畳み自転車、自称「ロシナンテ」号を持ち込み、スペイン・マドリッドまでの格安往復航空券 28 日 FIX チケット (28 日間は帰国できない) を持って、スペインのサンチャゴ巡礼の旅に出て 6 月 29 日に帰国しました。その旅について記します。

計画ではフランス側からピレネー山脈を一日歩き、山越えした麓のスペインから自転車に乗り、約 800km のキリスト教徒の巡礼街道を 15 日間でサンチャゴまで走る予定でした。目的はバックパッカーのように費用最小限で巡礼路を走り、その国の歴史、文化、人に触れるリアルな体験をしてみたかったこと。(バックパッカーや放浪の旅が私の憧れでした)

この巡礼路は飯島和子様が前回の羊歯 32 号で「夢の途中」というタイトルで寄稿された道。その後事情で行くことが出来なくなった飯島様から、巡礼者のシンボルの「帆立貝」を譲り受け、それをザックに吊り下げて。何故歩き巡礼ではなく自転車なの？ それは自転車旅行が好きで、また歩きより楽だし、少ない日数で済むという不純な理由からでした。

歩き始めるとピレネー山脈は日本の険しい峡谷のような山ではなく、標高 1,450 m の緑の丘陵、深い霧の中から聞こえてくる草を食む羊のカウベルの鈴音、バスク地方特有の白壁と赤い屋根の家が点在する天国でした。

ところが約 8 時間歩いた後スペインに入り、宿に預けた自転車を組み立ててみると、走行不可能なまでに壊れていました。無料輸送がたたりました。この村で自転車が修理可能な店はありません。帰国の飛行機は 28 日 FIX チケットであり帰国することもできない。しかし目標は変えずに自分が出来る範囲のことをやってみようと思い、どうするか考えあぐねたすえ残念でしたが「ロシナンテ」号は廃棄して歩き巡礼に変更しました。

歩く距離は巡礼街道の途中のレオン市までバス、電車に乗り、そこからサンチャゴ大聖堂まで 346km、その先「地の果て」と言われた大西洋岸まで 87km 合計 433km を歩くことにしました。幸い靴はピレネー山脈を歩く目的でウォーキングシューズを履いており、日本で暫く足慣らしをしてきている。荷物を背負うザックは途中で購入する、(48L を購入) と決めました。結果として 10kg 以上の荷物に腰を痛めて苦労しましたが、16 日間で歩き通すことができました。

巡礼の一日は朝 6 時起床、7 時出発、途中のバールでコーヒーとトーストの朝食、昼食は硬いフランスパンに生ハム、チーズ、野菜を挟んだ大きなサンドイッチとコーラ、25km 程度歩いて 14 時頃巡礼宿に到着、シャワーを浴び、洗濯、同宿者とビールで乾杯、街の散歩、夕食は巡礼宿付近のレストランで摂り、スープまたはサラダ、魚または鶏、ワインまたは水、デザートが一般的なメニューの巡礼定食でした。たまにはパエジャも出ました。就寝が 20 時頃の繰り返しです。巡礼宿は寝袋持参でベッドシートと枕カバーが提供されて、公営宿で 600 円、男女相部屋、夕食は 1200 円から 1500 円位です。一日平均実費 5,000 円と格安でした。スーパーで食材を購入して、巡礼宿に設置してある調理場で自炊して、自分の食べたい食事を作る人達もいました。

この巡礼路は世界遺産のためか、宿泊費や食費が一般の料金より安いと感じます。日本で世界遺産と名前が付くと、逆に全ての価格が他より高いと感じるのは大違いではないかと思えます。日本では誰のために世界遺産登録に懸命なのか疑問を感じます。

巡礼路には道標の黄色いペンキの矢印が 800km の要所、要所に描かれていて他人に道を訪ねなくても歩けるようになっています。それでも 3 回位は迷いましたが。サンチャゴにきた巡礼者数は 2010 年に 6 コース合計 27 万人。内日本人は 800 人。巡礼の動機は宗教的な人が 50% で他は私と同じ文化やその他とのこと。

サンチャゴに近づくにつれて、しっとりとした緑の山と、日本でも冬の西高東低気圧配置の日に時々は見られる、山と空の境界であるスカイラインのクッキリした、素晴らしい景色を見ることができて感動しました。

またこんなこともありました。昼食をあるカフェテラスで摂っている時のこと、近くのラジオから私も知っている米国のフォークソング（曲名は失念）が流れていた。食事の 5~6 人の中の一人の黒人の大男が突然声を出して泣き出しました。故郷を思い出したのだろう。私の隣にいた地元のおばさんが「彼は若いからね」と言う。私も「巡礼者は誰でも一度は「ワッ」と泣き出すのよ。余りの道の遠さに」と読んだ本を思い出した。彼も歩き出してからここまで 23 日位はかかっていると思う。後 10 日はかかる。それ程道は遠い。

巡礼路は国籍が違って巡礼という同じ目的を持った老若男女が集まって、お互い言葉は分からずとも「オラッ」「ブエン・カミーノ」（こんにちは！ 良い巡礼を！）と声をかけあい、それだけで「頑張って歩こうね」という気持ちが通じ元気が出ました。

バスク人だという 24 歳女性、巡礼路は 3 回目、がっちりした体格のまるで女戦士、スペインの 71 歳女性は毎年違う巡礼コースを歩き、今年は自宅からサンチャゴま

で1,000km歩いて、地元新聞に掲載された記事をメールしてきた元気女性。自転車でフランスから2,000km走ってきたが、途中で指を犬に咬まれてアンハッピーだと苦笑いしていたドイツ人50歳代の男性。色々な人に出会いましたが、みんな長期間歩いていても明るい表情で巡礼を楽しんでいると感じました。はまりこむのだと後から聞きました。登山とおんなじ？

今回の私の巡礼は山、高原、野原、田舎の村等433kmをただひたすら歩きました。そして終わって感じたことは、巡礼も登山やハイキングと同じで、自然の中を歩くという行動を通じて、自分の体と精神が浄化され、強くなっていくような気がしたことでした。

思えば自転車が壊れてくれたことにより、自分をみつめて歩くという、巡礼本来の貴重な体験ができたことに感謝しています。

以上



サンタカタリナ

2011-06-06

撮影 筆者

# 佐渡・金北山 一人旅

依田 ふみ

実施日 平成 21 年 5 月 29 日～31 日

朝 6 時、横浜を出る時は雨、関越道の赤城高原を過ぎる頃、雲の間から青空。ドライブ気分は最高。新潟西インターを降り、新潟港へ。駐車場が満車のため待たされ、両津港 13 時 10 分発の金北ライナーバスに乗り遅れ、佐渡港からドンデン山荘までタクシー代 4,600 円は予定外の出費だが、1 日 1 本しかないバスなのでしかたがない。ドンデン山荘は大佐渡縦走トレッキングのほぼ中間に位置している。受付で部屋のキーを受け取り、2 階の 9 部屋あるうちのカタクリ名の部屋へ。こざっぱりした 2 段ベッドが 2 つ。風呂もあり疲れを癒してくれる。

翌朝 7 時、山荘を出発。大佐渡自然遊歩道入口から真砂の峰を過ぎる頃、遥かに防衛省の丸いドームが見え隠れする。天狗の休場を過ぎると色々な花が顔を見せ、あやめ池を過ぎて、シラネアオイ、ショウジョウバカマ、カタクリの群生に満喫。しばらく行くと金北山の急登が続く。頂上には大きなドームがあり、その隣に金北山の神社があり、殺風景だが展望は良い。山頂を少し降りた所に石の鳥居があったが、2 本の柱を残し上の横の鳥居 2 本は崩れ落ちていた。新潟地震で落ちたのだろうか。理由が分からず山頂を後にする。下りの防衛省管理道路が延々と白雲台バス停まで続く。白雲台バス停には売店があったが、現在は解体して廃墟になっていた。長いことバス（16 時 30 分発）を待ち、両津港へ。加茂湖にある宿に泊まり、翌日トキの里を見学。ジェットfoil（高速船）で新潟港へ。そして関越道にのり一路横浜へ。



ショウジョウバカマ



## 蜂騒動顛末の記



今泉 美代子

私にとって山登りの目的は、山頂に立ち達成感とすばらしいパノラマに感動することでした。ある時、山波を作っている尾根に気づき、歩いてみたいと思うようになりました。

昨年の十月十七日「尾名手尾根」の山行に参加させていただいた時の事です。登山口から五分くらい登った畑の中の小木の根元から、急に黄色と黒の縞模様の体長三センチはあろうかと思われる蜂が大量に飛び出して来ました。

姿勢を低くして通りすごしたかと思ったのですが、首の盆の窪辺りに違和感があり変だと思うと同時に激痛が来ました。

周りにいた方に爪で毒を絞り出していただくも、余りの痛さに山行の中止を係の方に告げて、近くの民家に駆け込み救急車の手配をお願いしました。気が付けば他にも二～三人が刺されて駆け込んで来ました。痛みも頂点に達し寒気がしたり冷や汗が出たりで立ってられず、家の方が持って来てくださった氷で冷やしながら縁側で横になり救急車を待ちました。 四十分ぐらいで上野原から来た救急車に収容され病院へ運ばれました。車内で手当てをしていただきましたが、血圧が下がり寒くなりました。

病院では急患として診ていただきましたが、蜂に刺されてから一時間半が経過していて、アレルギー反応も無かったので先生は痛み止めと軟膏を処方して下さり、次回刺されたときの注意を繰返し説明して下さいました。 以下はその注意事項です。

一 抗体が出来てしまったのでアナフラキシー（急性アレルギー反応）に気を付けること。例として呼吸困難、血圧低下、めまい、意識障害など少しでも感じたら一刻も早く医療機関に行くこと。

二 緊急の処置用に「エピペン」を用意していると安心。「エピペン」とは自己注射薬で一時的にショックの症状を緩和することが出来る。但し、有効期間は一年、登録制であるから医療機関で取り寄せていただく。 私の場合は痛みが取れる迄一日半、腫れが引くまで三日、皮膚の感覚が戻るまで二週間ぐらいかかりました。一般に蜂の活動期は七月から九月と云われてきましたが、十月中でも里山では危険です。毎年三十名前後の方が蜂に刺されて命を落とされている事実もあります。楽しい山行で終わりますよう皆さん呉々も気をつけてください。



## 四季・山

中村 純平

### 春・山笑う

全面眞白き絨緞の下から  
かすかな雪鈴の音～雪どけ  
一瞬の春風が一気に通り貫ける  
淡いピンクの緞帳（どんちょう）が、徐々に天空より舞い降りてくる  
谷間を縫って、雷鳴がオーケストラのハーモニーとなって鳴り響く  
青葉の舞台に役者が揃う  
霞が峰々を覆うと、軟らかな微笑が春風に乗る

### 夏・山滴（した）たる

仮装舞台に引き出された道化師たち、歌、太鼓、笛、楽器鳴り響き謳う  
青葉のなげき、悲しみ、笑い。花の香り  
川のせせらぎ・岩のしぶき  
生物（いきもの）の吐息  
夏・本番・全山にこだまし  
響宴が始まる――青葉滴たる

### 秋・山粧う

夏から秋へ  
秋風が峯々をそそのかし、黄金の輝を持って、染めあげる  
過ぎ去りし、青春（こと）を重ね、赤・黄・紫七色に変化に纏（まと）い  
一葉々が、樹海を縫って  
やがて山々を粧う

### 冬・山眠る

白色のキャンパスに良質な筆で、墨を描き舞い落とした地象  
香も。音も。色も無い――静寂の世界  
時々、白雪の広野に雪煙が地吹となって鳴り響く――罨（こだま）する  
山々の神々が、沈黙・静粛  
そして、深い眠りに入る

GOKUROSAMA 。  
good, night ∞

## 父と登った初めての北アルプス

栗田 克行

私は中学2年のときに初めて父に誘われて登山をした。北アルプス、燕岳・槍ヶ岳・上高地の表銀座コースだった。

父は当時住んでいた滋賀県の近場の山を一人で登っていたが、そろそろ一緒に登れるだろうと私を誘ったのだ。私も興味があったので喜んで同行することにした。

中房温泉から登り始めてそれほど苦勞なしに燕山荘に到着した。そのときに初めて見たコマクサの可憐さと燕岳の岩が露出した独特の山容に魅せられてしまい、いっぺんで山が好きになってしまった。

翌日は大天井岳・西岳・槍ヶ岳の表銀座コースを歩いた。天気は快晴で、目的の槍ヶ岳が随所から見ることができ、パノラマを楽しみながら歩いた。父は若いころに結核をわずらったせいもあり体力がなく、歩くのはゆっくりだった。私は気がつくと一人で先に歩いている状態が多く、父を待つために休憩時間も十分とれて、疲れなどはまったく感じなかった。

東鎌尾根を登っているときに急にあたりが暗くなり雨が降り出した。そのうちに雷が鳴りだして、登山者たちはちりぢりばらばらの状態になって岩陰などに避難した。雷が至近距離に落ちたときにはバリッという衝撃音がして地面が揺れ、空気がビリビリした状態になり山に登っているときの雷の怖さを身をもって体験した。雷が通り過ぎてからの東鎌尾根の登山は快適で槍ヶ岳山荘に到着するとすぐに槍ヶ岳頂上に向かった。このときに岩登りが面白いものだと知った。

3日目は槍ヶ岳・槍沢・上高地へのルート。下りは長くて忍耐が必要だと感じたが、徳沢園あたりから周囲の環境が気持ちよくなって、避暑地をハイキングしているような感じで歩を進めた。上高地の河童橋やその景色のよさにも感動して、楽しかった登山は終わった。

私は中学時代にはバレーボール部に入っていたが、北アルプスの記憶が忘れられなかったので、高校に入学すると山岳部に入部した。比良山に何度か登った後に初めての夏合宿で北アルプスの朝日岳・白馬岳・唐松岳・五竜岳の縦走をした。重いキス

リングを背負っての登山は疲れるものだったが、初日に長い登りに疲れ果てたときに到達した夕日が原での天上の楽園のような景色には感動した。ここで少し昼寝をさせてもらったのはいい思い出である。

私が高校を卒業するとき父の転勤で東京に引越しをした。父とはその後一緒に登山することはなかったが、父は休みになると趣味のカメラを携えて山に行っていたが、定年後は絵画も始めて、撮ってきた写真を元にして家で絵を描いていた。時々道に迷って帰宅が遅くなることがあったが、男体山に行ったときはその日に帰ってこなかった。道に迷って野宿をして、翌日になって帰ってきたのだ。

家族はそれを心配して単独行をやめて登山クラブに入ることを薦めた結果、新ハイキングクラブに入ることになった。父から新ハイキングクラブの山行の様子を聞いて、それまで一度も一緒に登山をしたことがなかった母も新ハイキングクラブに加入して一緒に行くようになった。母は庭いじりが好きだったので、野草や高山植物を見るのが主目的だったと思う。それまでなかった植物百科や野草の本が急に増えだした。野外活動をしなくて家に閉じこもっていた母が山に行くようになったのは私も嬉しかった。

もう二人とも亡くなってしまったが、父も母も 80 歳あたりまで登山やハイキングを生きがいにして元気に過ごせたことはとてもよかったと思っている。

私自身も新ハイキングクラブに加入することになり、なぜ自分は山が好きになったのか考えて見た。そのときになって初めて、父に誘われて登った北アルプスがきっかけであることに気がついた。今頃になって父に感謝している自分に気がついた次第である。



# 私の山行

竹尾 亮三

私は2004年1月に横浜支部に入会しました。この7年は光陰矢の如しです。7年間を振り返ってみます。

2004年6月に会社人生を卒業しようと思いました。前年の7月頃、図書館から中高年の山歩きの本を借りて読み、別な本を自分でも購入しました。

9月にザック、登山靴、コンパス等を購入、直ぐ単独で谷峨駅～大野山～丹沢湖を歩きました。北海道の学生時代に、ほんの少し楽しんだ山歩きを思い出し、単独で歩き始めると、家族が心配しましたので横浜支部に入会しました。

支部山行の係を初めて担当したのは大野山からスタートして、89回目の2006年11月の「三ツ峠山」でした。今2011年3月26日の本部合同の「大山～不動尻」が257回目で、43名の大会の予定でしたが、3月11日に東北関東大震災が発生し、総合的に判断し中止にしました。忘れられないでしょう。

7年間、支部の皆さんと、時には単独で、家族と、学友と山行を楽しみました。支部山行にご一緒させて頂き、リーダーや参加の皆さんから色々と学びました。自分が書物で勉強し、実践した事を見直す為に、室内クライミングジムでプロに付いて、三点確保の指導を受け、垂直に近い壁を登りました。

丹沢の教室でコンパスと地図の講習を受け、それらを使ってきた自分に80点を付けました。何度も道標を見過ぎました。八ヶ岳の硫黄岳を下山しようとした時ガスが発生し何にも見えなくなりました。しかも道標の下山口の文字が消えていました。地図とコンパスは私の強力なパートナーです。

山岳気象アドバイザーの講習会も受けました。気象が一番難しいです。8月の縦走山行前には3日坊主ですが、必ず雷対策を読み直して出かけています。

雪山山行はやらない方針でしたが、小樽育ちで、山スキーを楽しんだせいか、雪の中を登山靴で歩きたくなりました。2006年1月に関東地区に大雪が降った翌日、高尾山～景信山を初めてアイゼンを付け単独で歩きました。これが災いして、山岳プロ指導の雪山体験、冬山に2度出かけ、基本を教えてもらい、プロの力量を感じました。おかげで白馬三山縦走では雪渓を上下し、横断するのに不安はなく、落石の対応に注意を向けられました。

消防署の1日救急講習にも参加しました。これは実施する事がなかったので忘れていました。横浜支部発行の「落ち着け！！」がいつもザックに入っています。

私の山行開始は会社卒業の直前です。体力、技術、経験、残り少ない人生を考え、展望、お花、写真撮影、未知との遭遇などを楽しめる山を選び、出来るだけ、

行動時間に余裕を持って計画しています。

欲張らないようにしていますが、その山の歩きたい時期、期待するものに少しこだわっています。期待した日本カモシカや雷鳥の親子にあった時、初めて花、見頃の花に出会った時は嬉しいものです。時には心身に安らぎの温泉付き山行、人生には歌が有りのカラオケ付き山行、雪山展望とスピード感を味わうスキー山行も楽しむ事にしています。

参加する山行や自分の係の山行の90%以上は初めての山です。山行計画には私自身の為と、参加を検討する方が知りたい情報を出来るだけ記載しています。私が行きたい山を選ぶ源は、経験者の話、図書館で毎月読む「山と溪谷」、読賣新聞の「一步二歩山歩」、旅行社の山岳ツアー案内、SHC 毎月号、ガイドブックなどです。図書館の「〇〇県の山」も更新されています。

計画を作成する時は日の出入、交通路線、山小屋の情報、出発直前の山道状況、現地の天気などをインターネットや市町村の観光課などで情報をとっています。一人で出かけても道迷いを起こさない事、安全に対応するリスク回避も意識しています。情報源には何時も感謝しています。お花や紅葉の時期などは歩いた方々のインターネット上の報告が大変参考になります。

退職前はインターネットやメールを人にやってもらう事が出来ました。自分で出来るように、退職する前に週2回6ヶ月間パソコンスクールに通いました。このおかげで経験の少ない私でも情報を集め、計画書を作成して、山行の係が出来たと思っています。メールは参加者への連絡に大きな力を発揮してくれます。自然や自然を取り巻く環境は変化しています。最新の情報が必要です。それでも想定外の事、うっかりミスが起きます。その時は同行者に助けて頂いております。

富士山にも登った事がない私ですが、この7年間の中でしっかり情報を集めて計画書を作成し、コースを頭に入れて歩いた縦走路山行が忘れられません。

2004～06年夏、3年連続の八ヶ岳連峰、2007年夏、常念岳～蝶ヶ岳、秋 火打山～妙高山、2008年夏、白馬三山、2009年夏、木曾駒ヶ岳～宝剣岳～三ツ沢岳、2010年夏、立山三山、鳳凰三山です。

もうひとつ忘れられないのは歩き始めて2年目の2006年5月の平日に、岩場に生える見頃のアカヤシオを見たく、前日に山小屋と連絡をとり、単独で清滝小屋（泊）～両神山～西岳～八丁峠～坂本に挑戦しました。両神山山頂からは連なる岩峰を長い鎖で降りる厳しい岩稜縦走では誰にも会わず、緊張の連続でした。

初めて尾瀬を訪れたのは2006年7月の芹沢さん係の山行でした。芹沢さんは尾瀬は「何時来ても、何度来ても良いところ」と教えてくれました。2007年5月末

日、私はミズバショウの見頃とお天気を前日に確認して、早朝に一人で車を走らせました。残雪の至仏山をバックに池塘に咲くミズバショウの群落にたどり着いた時には実に感激しました。下田代十字路に1泊しました。2009年7月には、学友5人で芹沢さんの逆コースで見頃なニッコウキスゲ群を堪能し、至仏山へ登るにつれ尾瀬ヶ原全体と燧ヶ岳の景色が少しずつ変化してゆくのを楽しみました。

山ノ鼻の池塘で、なかなか見られない、花の中心に赤い雌しべを彩った、黄色いオゼコウホネが水面からちょっと顔を出していました。この愛くるしい姿を見た時の感動は忘れません。

金本さん係の燧ヶ岳では紅葉の時期の機会を頂きました。7年間で4回も訪れた尾瀬です。今2011年の夏は高山植物の宝庫、白山に挑戦します。

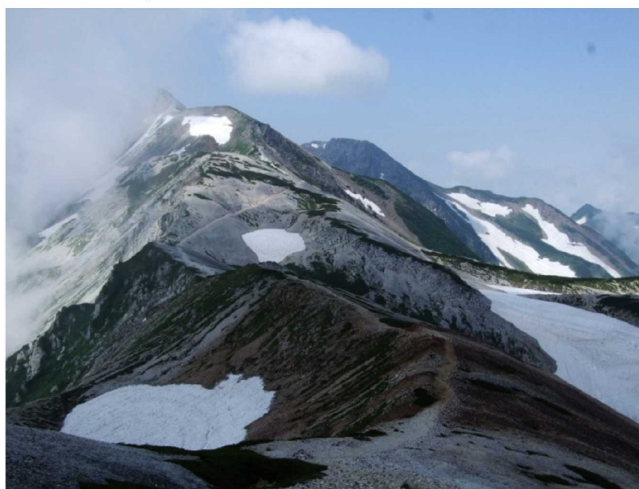
春、秋の里山歩き、一度に広範囲の色々な展望を楽しめる山岳ドライブも大好きです。スキーもまだ止められません。ホームコースのゴルフ場からは金時山を目前に富士山、愛鷹山連峰を見ながら、時々ナイスショットをしています。

横浜支部の大先輩、先輩の心身の若々しさにはいつも敬意を表しています。私も先輩の年齢まで山行を楽しむ事が出来るように精進したいと思います。私より後に入会してきた方のほとんどが山の経験豊富な方々です。色々な山の係をやって頂き、参加者の選択の幅が広がるように、それを知って横浜支部に入会してくる人が増加するように、皆で育てる、明るい横浜支部を願っています。

今日までの山行にありがとう。これからの山行によろしく。

横浜支部の皆さんに Thank You Very Much です。2011年4月4日

右：2008年8月白馬岳  
に向う途中の小蓮華山に  
向って撮った写真です。  
雪田と高山植物の組合せ  
の美しさに魅せられ、  
2010年8月立山三山へ。  
2011年7月火打山～妙  
高山、7月～8月白山を  
予定しています。



撮影 筆者

## 「古希を過ぎ尾瀬を歩いた」

福田 徳郎

SHC横浜支部に入会したのは4年ほど前、古希を目の前にした年だった。いまなら「70歳の入会にご遠慮下さい」と云われるのだろうが、さしてチェックもなく、支部会員になって今日まで過ごしている。

それまでの僕ときたら40年近い会社員生活では趣味でも道楽でも山を楽しんで歩く機会はまったくなかった。小学生の終わりから大学を出るまで近江・比叡山の寺の小僧で、標高700m付近の山寺に寝起きしていたから、朝夕、山道を登り降りしたが、それは暮らしの為に歩いているので、山歩きの楽しみなどこれっぽちもなく、「日々がしんどいなあ」の連続だった。

会社でお役目とはいえ、パソコンの画面をにらみ、人や物の手配をしていた半生はまさに運動不足そのもので足は萎えて、すっかり衰え、このままでは半病人と心機一転、支部の末席に潜り込んだ。リュックサックにぶら下がっている便利な数あるバンドの正しい扱い方だって、未だにマスターしていないのに、行ってみたい山や峠はあるのだ。越後の雄峰、駒ヶ岳。大菩薩峠。積雪期の上高地などが憧れだった。で、入会后、先輩のお陰で、順々に憧れの山や峠におのれの足で立つことが出来たのだった。

今年の2011年6月、「尾瀬にゆきませんか」という支部山行があった。少々、足に不安があるが例会の席上、次々と挙がる手を見てるとご婦人ばかり。男性の参加者はリーダーと、支部長と私の3名だけだという。

「きょうび、6月の尾瀬はご婦人ばかりですよ」と、誰かが言っていたが、私にとってはなにせ初めての尾瀬行きなのである。

鳩待峠から、急な下りを尾瀬ヶ原に出る。水芭蕉、リュウキンカ、ヒメシヤクナゲ、ショウジョウバカマ、ミツガシワなどとりどりに湿原を彩り、甘い香りを含んだ上機嫌の風が吹き渡ってゆくのだ。

風がこんなに気持ち良いものだったとは……………。

尾瀬の素晴らしさは筆舌に尽くされている。で、湿原で機嫌良く上等な風に吹かれていると、もう四半世紀も昔、インドのガンジス川の下流に近いパトナという古都の渡し船のデッキで吹かれた風が急に蘇ってきたのだった。



僕の乗った800トンほどの蒸気で動く外輪船は、雨期になると川幅が1.5<sup>km</sup>にもなるガンジスを斜行しつつ1時間くらい掛けて対岸に向かって航行するのだ。上甲板のデッキで川風に吹かれていると

「Breeze is nice」

というつぶやきが聞こえてきた。

振り返ると20歳前後のイギリスの青年がうっとりとした表情で風に金髪を夕陽になびかせている。

大河を吹く風は甘い香すら混じっている。

「きっと天国からやってくる風ですね」と、僕とその青年はうなずきつつ、風がやってくる方向に顔を向け、身体も心もほぐされるようなマッサージをして貰った気分になったのだった。

「もし、極楽とよばれる世界があるとすれば、溼原がとりどりの花と優しい風に吹かれるほんのこの時季だけ、極楽は尾瀬に現れるのではないか」

古希を過ぎて日々老いぼれてゆくのを嘆いていても仕方がない。素敵なこともある。と、弾むような尾瀬への初旅だった。 (この項おわり)



「溢れんばかりの客を乗せ大河ガンジスを渡る外輪船」

インド・ビハール州 パトナのガンジス川で

1971年10月 撮影 筆者

## 山との出会い

柿沢 泰子

1996年新高ハイに入会、ほとんど本部山行のみでしたが、5年前本部合同に参加した折当時の支部長に進められ横浜支部入会を決心しました。馴れるにつれて本部にはない家庭的な雰囲気ですっかり魅了されてしまいました。

山の魅力にとりつかれたのは、地元の歩く会、ここで山歩きの楽しさを知り高山植物との出会いがなにより心癒され健気に逞しく咲く姿に感動し、より高い山、固有種の咲く山へと導かれて行きました。

雪の上に点々と散らばっているウサギのフンに感嘆の声をあげたり、日本カモシカ、ノウサギ、子連のライチョウ、リス、オコジョ、キタキツネ。山ボウシの実を手から食べたシカ、まるで先導しているかのように我々の前を歩いて登っていくキジのオス、大きな（クマ？）の足跡、数えきれない程の植物や動物や鳥との出会いがあり、どれだけ山が感動と喜びを与えてくれたか計り知れない。

一番印象に残っているのは、田子の浦海岸で前泊し、3776mの富士山を3日かけて登った事です。大勢のボランティアの方の協力があったからこそ登頂でしたが一生の思い出です。

高度順応さえ出来れば特別な技術はいらない山だと聞いて、友人の進めもあり、アフリカ大陸最高峰 5895m キリマンジャロ、熱帯雨林から氷河迄、を6日間で往復すると云う想像の範囲を超えた世界に2年前挑戦しました。

現地ガイド、マウンテンガイド、参加者女性3人のパーティーはポレポレ（ゆっくりゆっくり）登り、5日目ウフルピークに到着、360度の大自然を満喫しました。

海外登山で知りあった友人達と年1~2回登山するのも楽しみの一つ、宮崎、大阪、千葉、東京、神奈川から集まっては目的を果し三々五々散って行く、そんな仲間を新高ハイとは違った新鮮味があり大切にしたいと思う。

骨折をくり返し、去年は変型関節症に苦しみ、幾多の困難を乗り越えてまでも山に親しんでいきたい。同年代と比べればまだまだ足は強い方だと思っている、山好きでなかったらとっくに萎えてしまっていたかも知れない山あってこそこの体“山よありがとう”の一言につきる。

2011, 3, 11 「2:46」 東日本に大震災が起きた。

「東北関東大震災」リアルタイムで飛び込んでくる映像に目が釘付けになり言葉を失った。

その時私は何をしたかと云うと、一ヶ所だけ点けていたストーブを消し、逃げ道のドアをあけ、棚の上の本を押さえウロウロするばかりだった。あの美しい三陸海岸が見るも無残な姿になり、死者不明者2万人超と云う戦後最大な被害、合わせて福島原発の事故、いまだ先の見えない避難所生活を送っている人がいる。余りにも凄惨な状況に仰天しています。被害にあわれた方々に心からお見舞い申し上げます。

“一日も早く復興作業が進みます様に”



キリマンジャロ山頂 ウフルピーク 5895mにて

2009-12-08 筆者

## 私の山登り～山遊び～山歩き

石井 純一

青年期の一時期、登山に熱中した。周辺で起きた幾度かの事故により、登山を続けるか否か迷った日もあったが、就職に伴って危険度の高い登山から自ずと距離を置くことになった。最初の勤務地の新潟では、ゲレンデスキー、山スキー、雪山登山、そして四季折々の山を楽しんだ。その後、頻繁な転勤と海外駐在のために山から遠ざかって行き、山のことを思い出す日はあったものの、登りたいとは思わなかったし、登る体力があるとも思えなかった。

こうして山は遠い過去のものになって行ったが、10数年前の鎌倉への転居が転機だった。鎌倉の寺社巡りをしている内に三浦半島へ遠出するようになり、10%の減量と喫煙をやめたことも助けとなり、徐々に体力が回復して行った。歩き始めてから数年が経過し、もう少し遠出したくなって20回程、丹沢を歩き、さらに遠くへとある夏、ありあわせのブーツを履いて白峰三山を歩いた。深い谷を隔てて甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山が連なり、山の斜面には色とりどりの花が咲き乱れていて、この場所に戻れたことが心の底から嬉しかった。2日目の農鳥小屋では夜に雷雨があり、安物のキャンプ用テントの中が水浸しになったばかりか水が流れ出したため、テントの中でブーツを履いてザックに腰掛けて夜明けを待った。辛く長い一夜ではあったが、忘れ得ぬ思い出となった。少しだけ昔に戻れたようなこの山歩きの後、体力に少し自信を持てたことにも後押しされて、登山用具を揃えて山歩きを続けることにした。それから凡そ10年間、幾度か勤務地が変わったが山歩きを続けてきた。今、元気に山を歩けることがとても嬉しくて、昔のように汗まみれになって歩いていると、昔の山行が懐かしく思い出される。思い出は中学校の夏季林間学校で登った西岳（八ヶ岳）まで遡る。蒸気機関車が吐き出す黒煙、爽やかな富士見高原と周辺の山々、西岳山頂から見た八ヶ岳主稜線が浮かんで来て、これが私の山の原点かも知れない。ここから順に記憶を辿って行くと、技術向上に重きを置いていた登山から、仲間たちとの山での遊び、散歩の延長である一人きりの山歩きへと繋がって行く。一昨年、遊びの部分も入れようと横浜支部に入会させてもらった。支部山行は賑やかで楽しく、一人山行には気儘に歩く楽しさがある。これからも色々な形で山歩きを続け、若い頃には及びもつかないが、晩年になってから、あの頃も捨てたものではないと思えるような思い出を残して行きたい。山を大切に思う心を持ち続けながら。

(初投稿ゆえ自己紹介を兼ねて)

サンカヨウ



## ブナから始まった山歩き

古屋 喜代子

山は30歳前後に人に連れられて2、3座登っただけだった。その後30年近く山とは無縁の暮らしだった。暑いのも汗を流すのも好きでなかった。それなのに「還暦+リタイア記念」と自分に言い聞かせるようにして白神山地へ出かけたのは、社内報に載った二ツ森のブナ林に一目惚れしてしまったせいだ。写真で出会ってからちょうど10年目、2007年6月のことだった。ネットで白神山地東麓の温泉宿を探し3連泊の予約を入れた。横浜から夜行バスで、あれこれ思ってもよく眠れないまま翌朝7時に弘前に到着。そこからまたバスで暗門に向かう。

1日目（到着日）快晴。午前中は暗門川沿いに第三滝、第二滝、第一滝と遡る。落差は第一滝が一番で43mあるらしいが見た感じはそれほどでもなかった。滝壺近くの水はびっくりするほど冷たかった。往復2時間のコースはトレッキングというよりウォーキングのよう。これで中級なら明日も大丈夫！とちょっと安心した。通行止めが解除されて間もない道の斜面には残雪があった。道傍に小さな花がちらほら咲いていた。他にも歩いている人が何人かいた。午後は暗門の滝遊歩道のブナ林散策に出かけた。木漏れ日がきらきら光る林は明るく清々しくて、ブナっ子気分広い林を歩き回り時の経つのを忘れた。

2日目 曇 宿から津軽峠までバスで登り、峠から暗門温泉駐車場まで山地の東縁を北から南へ辿る4時間のトレッキング。高倉森まで登りその後下る。高低差は少ないがこの旅のハイライトだ。峠近くのマザーツリー（樹齢四百年のブナ）に挨拶してスタートした途端、「最近熊目撃情報あり注意！」の看板を見つけてギョッとす。鈴の準備はなく仕方なくラジオをつけた。歩き始めてすぐガイドと若い女性が立ち止まって話しているのに出会った。高倉森まで往復するのだろう。会釈して先へ進む。しばらくしてFM放送が聞きづらくなりラジオはOFFに。周りはブナばかり、特に進行方向右側の森は圧巻だった。昨日と違って緑滴るという形容がぴったりの景色、身体も心も緑に染まるようで感激もひとしおだ。ブナ達は白っぽい幹に黒い地衣類でアクセントをつけて違いを主張しているようだった。風はなく音もない静かな世界だった。10年かかったが来ることができ、この森に身を置けたことが何より嬉しかった。足元に白い小さな花が群生していた。花の種類は少なかった。1株のギンリョウソウが印象に残った。高倉森で簡単な昼食を済ませ、すぐまた歩き始めた。後半にかかった頃、地元で「熊落とし」と呼ばれている馬の背があった。急な下りは腰まで茂る下草で足元が見えず、2本のロープの間を爪先探

りでややスリリングな気分を味わいながら歩いた。500m毎の標識で時間をチェックしながら順調に下り、森の出口まであと少しの所で道がわからなくなった。頭の中が真っ白になりパニック状態。森の中を右往左往し斜面を登り下りし、少し休んで甘いものを口にしたりして探すこと2時間、道は見つからない。さっき歩いた所をまた歩いたりしている。息が上って座り込む。もう動かずに助けが来るまで待とうかと思ったりする。TVのローカルニュースの画面が頭をよぎる。「誰かいませんか〜」と何度か叫んでみたけれど返事が聞こえるはずもない。そのうちサルがキーキー鳴き始めた。怒っているみたい。このままではまずい。今いる場所の見当をつけてコンパスを頼りに下ろうと決心する。念のため出発前に購入したコンパスと宿にあったパンフレットの地図が役に立った。これがなかったらほんとにローカルニュースに出ることになったかも知れない。

クマガラのドラミングに励まされサルの声に脅かされながら、5分おきにコンパスを見て南を目指し、迷う直前の道に飛び出した。「やった！」長く感じたが20分しか経っていなかった。だいぶ戻ってしまっていた。そこから更に20分、今度は慎重に下って出口に辿り着いたときは心底安堵した。すぐに回れ右して森に向かって最敬礼し、山神様と森神様に深く感謝した。だがこれで終わりではなかった。最終バスは出てしまった後だった。もう足がない。下りだが宿まで12km以上ある。空も暗くなってきた。途方にくれていたら、売店で休憩中の2人の青年がこの後役場へ下りるので車に乗せてくれると言う。ありがたく厚意に甘えた。宿の玄関前まで送ってくれたのにお礼を固辞されどうしても受け取ろうとしなかった。「その分お土産を買ってください。」と言われた。宿に戻って間もなく降り出した雨は土砂降りになり一晩中音を立てて降っていた。温泉に首まで浸かり手足の擦り傷に湯が沁みて無事を実感した。

3日目 雨 バスでまた暗門駐車場まで出かけ、今一度森に向かって最敬礼。この日は森へは入らず暗門大橋付近のブナ林を散策した。雨粒を受け止めしつとりと濡れるブナ達にはちょっと大人っぽい風情があった。日々表情を変えるブナへの愛着は一層強くなり、思いは今も変わらない。暗門の売店でマタギ飯を食べた後も立ち去りがたく、ブナの四季のDVDを何度も見て午後を過ごした。

4日目 快晴 宿の売店で段ボール1箱分のお土産を買って宅配便にした。弘前に下るバスの窓から岩木山がよく見えた。トレッキング中励まされたこの山にも心の中でお礼を言った。弘前からは6人掛けボックス席に私1人。紺碧の日本海が美しかったが、白神山地が見える間は山を眺めて名残を惜しんだ。素人の初めての単独山歩きは達成感だけでなく反省点も多かった。もっと経験を積み、機会があれば山地の西側の森も歩きたいと思う。



## なぜ山歩き？

宮本 省治

僕の山歩きは自宅近くの散歩から始まった。

40歳を過ぎ、人生も後半戦に入ったその時、思い浮かんだフレーズが「老化は下半身から」。これを防止すべく始めたのが散歩である。最初はジョギングも試したが、すぐに歩いてしまい、あっさり中止、歩きのみ続けてきた。その内に、歩行時間もだんだん長くなって来る。そこで、“どうせやるなら山を歩いてみよう”と思いつく。道具一式揃えて、最初に行ったのが高尾山。張り切っていた僕は、その足で陣馬まで歩いてしまった。しかし、順調なスタートではなかった。景信の手前で足がつってしまったのだ。山の神に、山はそう簡単ではないよ、と教えられた記憶がある。

それ以降、丹沢や奥多摩への単独日帰りを繰り返して今日に至っている。この様に僕の山歩きは、歩く事そのものが目的と言える。従って、山での美しい花、すばらしい展望などは山歩きの味付けに過ぎない。とは言うものの、食事もおいしいものを食べたいように、山もやっぱり味付けの良い山へは行ってみたいものだ。



キヌガサソウ

# 山姥の五七五

長谷川 美江

初春や 視界の山へ お参りに

山行けば 出会いのチャンス そこにあり

九割は 精神力で あと鍛錬

トップして！ さあ歳の順で 歩きましょう

ベテランと 呼ばれて 真意はどこにあり

木蓮の 白き魂に 気圧されて

あのブルー ホタルカズラの 視野の角

山道の しばしなだらか 遠き峰

秋の小屋 四角い枠の 天体ショー

静寂を 破る音あり 木の実落つ

遠きもの 地震の後の 帰宅道

神怒る 醒めるな眠り 富士の山

山はあり 歩いているか またの夏





## 横浜支部とホームページ

和智 邦久

私が横浜支部に入会した時には、まだ支部のホームページ（以下 HP と略）はありませんでした。支部会員の平均年齢もだんだん高くなってきたとのこと。

支部の HP を立ち上げようという話が出ていたみたいですが、立ち上げるのにどのくらい費用が掛かるのか、また誰が担当するのか等で話が途切れていたようです。新しい支部会員を増やして行かなければと、誰しもが思っていたようでした。会員の募集はどうのようにしたら良いのか、そこで S 氏ら有志何人かが、HP で会員の募集をしたらどうかということでお話があり、HP を立ち上げるべく準備を初めました。私に HP に関していろいろ話を聞きたいとのことでした。私に全面的に協力して欲しいと、私は支部の HP を立ち上げは当初から賛成でした。

諸先輩方が 50 年も続けてきた横浜支部をこのまま衰退させていっていいのだろうかと思っていたからです。HP を立ち上げるのに費用がどのくらい掛かるのか、どのようなプロバイダーを選ぶのかということから始まりました。いろいろなプロバイダーを探しやっと思いましたが、そこは管理からすべて自らが行わなければならないのです。果たして出来るかどうか不安が 80%でも何とかやらなければとの思いで HP を立ち上げるべく準備を初め、約半年かけてやっと思案等が煮詰まってきましたので支部長に HP を立ち上げるようお願いし了解を頂きました。私は当初より HP は支部の皆様に見て頂くのではなく支部に 1 人でも新しい会員が入会して頂くためにとの思いでした。HP を立ち上げましたがなかなかクリック数があがりません。Yahoo、Google へ検索のための登録依頼をしましたが、登録されるまで約半年かかりましたが、徐々にクリック数が上がってきましたが、何か HP のインパクトが足りないのではと、内容の手直しを行って行きました。

高級なソフトを使用すれば良い HP が作成できるのですが、なにぶん少ない費用で作成しなければと思ひ、手持ちのソフトをフルに使用しての作成ですので思ったような HP が作れません。HP を立ち上げて 2 年半ごろから徐々に新しい会員が入会するようになってきました。やっと思安心というところですが、新しいソフトを活用していかないと時代遅れの HP になってしまい、クリック数も減ってしまうという思いがあります。これからも HP 維持のために微力ながらお手伝いさせて頂きたいのですが、何分私もだんだん年齢を重ねていくにつれ、毎年更新されていくソフトを習得するのについていけなくなっている状態です。でも HP を立ち上げてよかったとの思いです。

## 山での怖～い思ひ出

芹沢 隆久

40年近く、山行脚を続けていると今から思うとぞっとする場面に何度か出くわした。あれが一つ間違っていたら、今の私がいるかどうか。また、あれは何だったんだろう。そんな思ひ出を幾つか書き綴ってみます。

1. もう何十年も前のことだが、山溪のアルパインガイドからその頃懂れていた大石真人氏の「全国いで湯ガイド」という山の温泉を中心とした本が出版されていた。その中で紹介されていた「湯浜温泉」の項で須川温泉から栗駒山を越えて徒歩4時間、「6月24日に泊まった時にはこの谷をうめる何万匹というホタルの乱舞で…」という文に魅入られ、栗駒山を越えて湯浜温泉へ下る途中だった。6月なので未だ残雪が多く、下りのコースは幾つも残雪を横切らねばならなかった。その一つをトラバースしている時だった。何処からかちよろちよろと水の流れる音が聞こえてきたと思った瞬間だった。歩いていた所の雪が落とし穴みたいにすっぱり抜け、私は両サイドの雪に両手を広げて体を支え、かろうじて墜落するのを免れた。下は足が付かず雪解け水が流れていた。腕の力で何とか雪上に立つことが出来た。あの時両サイドの雪がもっと薄く、両手を広げても、そのまま崩れ落ちていたら、そしてもっと深かったらと今でもぞっとする。無事に湯浜温泉に着いてその晩、何万とはいかなかったが待望のホタルを見ても、妙に落ち着かなかったことを思い出す。
2. これもいつの頃か忘れてしまったが、確か7月の末だった。会社の仲間達と鳥海山に登った時のこと、御本社と呼ばれた頂上宿舎に泊まり、翌朝、外輪山の七高山で湯の台コースへ下山する皆と笑顔で別れ、一人秋田の太平山へ登るため矢島口の祓川への下りのコースを辿った時だった。この年も残雪が多く、ただでさえ雪田、雪溪の多いこのコースは雪が現れる度に、踏み跡と行く手の目印を慎重に確認しなければ、迷う可能性があった。そして大きな雪溪（大雪白大雪溪と思う）に差し掛かった。幾分、ガスも発生していて、雪溪のキレル向こう側が良く分からないのだ。誰も登山者はおらず、僅かに残る雪の上の踏み跡を追うしかなかった。そして雪溪がキレて樹木のある所に出たのだが、どう捜しても道跡が見つからない。仕方なく今来た雪の踏み跡を戻り、もう一度、他に人の通った痕跡が残っていないか確認し、他の踏み跡らしきものを見つけた。雪溪の入り口の所もガスではっきり見えなかった。この踏み跡に沿っていくしかなかった。勿論、不安感が押し寄せてきていた。焦ったらお終いだ。と

にかく落ち着こうと思った。深呼吸ぐらいしただろう。そしてその踏み跡のキレた先の矮小の木に赤い布を見つけたのだった。そしてそこには確かな道があった。この後もいくつもの雪田があって、気が抜けずに下山、七つ釜小屋を見つけてほっと一息。あの時更にガスが濃くなって、雪溪の出口も入口も分からなくなっていたら…。

3. そしてこれは記録があるのでわかるのだが、日時は1983年（昭和58年）9月10日。百名山の一つ、高妻山登山の時だった。戸隠キャンプ場、不動滝、氷清水の水場を経て一不動避難小屋に泊まったときだった。泊り客は私以外に女性2人だけだった。当然素泊まりなので、お互い和やかに自炊の夕食をした。寝る時間になると彼女らは小屋の中にテントを張ってその中に寝た。珍しいことではない。私も明日の登頂に備え、寝袋の中にもぐりこんだ。しかし何故か寝苦しくて中々寝付けない。そのうち小屋の外で複数の男の声で話し声がする。遅く着いた登山者だろう。そのうち小屋に入って来るだろうと思っていたが、一向に入って来ない。小屋の中は勿論、外も暗くなっている。これから登っても泊まる所はないはずだ。夕方、小屋の外で遠くの街の灯りを見ていたから、風に乗って声が上がって来たのだろうか。内容は分からないが間をおいて矢張り話し声が聞こえる。テントの中の女性たちは寝入っているようで寝息の音も聞こえない。起こすわけにもいかなかった。私は持ってきたイヤホン付きのラジオのボリュームをあげて、その声をやり過ごすしかなかった。眠られぬ夜が明けて、小屋の周りを確認したが、人の気配は感じなかった。心のもやもやを振り切るように高妻山登頂を果たした。

実はこの年は6月にも同様の体験をしている。上州の武尊山に登った折、友人と二人、手小屋沢避難小屋に泊まった時だった。狭い小屋で2人だけ寝ていると小屋の外で12時をかなり回った頃、確かに話し声が聞こえるのだ。夜明け前のまだ薄暗い時に外に出てみると若者が2人いた。訊くと彼らは小屋の近くにテントを張って寝ていたのだが、異様な音や声を聞き、眠れず夜通し話をしていたのだと云う。その声を私達は聞いたのだった。夜の闇は、まして山中の闇はただでさえ、妖気を孕んでいる。妖怪や霊は勿論、たとえ可愛い森の妖精に遭ったとしても、不気味さが残るだろう。人知や現世を越えた怨念が闇を彷徨していることを、心の奥に常に留め置かなくてはいけないのだろう。



## 私と山の文学書

青柳 征勝

ヤビツ峠行のバスに乗っていたら、後で若い男が『孤高の人』を読んだと話しているのが聞こえた。「誰が書いたのか忘れたがとてもいい本だった」と。内容も具体的にはなく漠然としていた。窓の外はガスで何も見えないので昔読んだ事を色々と思いだしてみたくなった。

たしか新田次郎の小説で、誰かを主人公として書いたものだがすぐに思いつかず加藤文太郎の『単独行』だと思いだしたらバスが終点に着いてしまった。そのまま表尾根縦走に向かったけれど、ずっとガスの中で展望もない。見る花など丹沢は少なくヤマボウシとニシキウツギぐらいしか目に入らず、印象も少なかったせいか、帰ってからやけに加藤文太郎のことが気になってしょうがなかった。

本棚を探したが単行本が見つからない。昔貸して忘れてしまったようだ。あかね書房の「日本山岳名著全集」を引っ張り出したら、すごい埃の山でほとんど見てなかった証拠だ。

6巻に細井吉造の「伊那谷 木曾谷」松井幹雄「霧の旅」と一緒に加藤文太郎「単独行」が収められていた。

中を開いてまずびっくりしたのは活字の小ささだ。今は新聞でも新刊本でも活字も大きくなって読みやすくなっている。購入した時は当たり前前の大きさだったはず。年をとってしまったのが証明された感じだ。眼鏡を変えて読み始めるととても懐かしく、少しずつ思い出してくる。加藤文太郎の遺稿集「単独行」を新田次郎が小説として纏めたものだが、大方内容は変わらない。人間離れしたその体力と山への情熱が凄い。読んでいるうちにどんどん引き込まれてしまう。真冬の北アルプスを単独で歩き廻り、最後に同行者と組み北鎌尾根で遭難死してしまう「孤高の人」で無くなってしまうのも何かの因果かとも思ってしまう。

加藤文太郎を思うとなぜか松濤明の「風雪のビバーク」が頭に浮かんでしまう。同じ様に冬の北鎌尾根に挑戦し遭難してしまう。相方の有元を見取り自分も死を決する事が手帳に書かれ、最後まで記録した遺言はご存知と思います。

又人並み外れに凄い登山家として私の好きな大島亮吉を上げたい。慶応時代は榎有恒の下で穂高周辺を又北海道の山、奥秩父の山、荒船高原散策と幅広い行動をロマンあふれるタッチで紀行文が書かれ、私の好きな文章が並んで山岳文学でも優れたものと思います。

又彼も若くして前穂高北尾根で逝ってしまう。遺稿集として「山/随想」として日本山岳名著全集に納められている。その後発行された遺稿集「漂泊者」「登高者」は限定本で大事に飾っています。

改めてこの全集を開いて懐かしい登山家の名前など見ると、若き頃山に憧れたころに帰り、物思いにふけてしまいました。

編集者田部重治、尾崎喜八、深田久弥 安川茂雄 写真に白旗史郎、三宅修、内田亮平・・・皆さん思い出しませんか。



雲の平 祖父岳から槍・穂高

2011-07-17 撮影 筆者

## 私の山とウォーキングについて

谷 真理子

毎月発行される支部ニュースに 私が係りを担当する山行が、時々前号と今号は違う山に変わっているとか、いつのまにかウォーキングに化けているのを見つけた方々、まただまされた？とお思いでしょうが、これには深い訳があります。

何しろウォーキングから初めた私の30代後半から40代中頃、トレッキングクラブで、又は他のクラブで活動していた時期に得た資料が、最近になり押入れの中から資料袋ごと見付かりました。ひっぱり出して懐かしさのあまり見直してみたら、私は今でも、あの頃の山へ行ったりウォーキングをしたりしているのだと改めて感じ入りました。

当時の資料は低山ばかりですが、良く出来た資料ですので、これを無駄にする訳にもいかず、利用しないともったいないしただの紙切れで終わってしまうと思いました。

そこで、これからも過去のこれらの資料を見直しつつ活用し、さらに新しいルートへの挑戦もしていきたいと考えています。

先輩諸氏の御指導、御鞭撻を賜り、成長していきたいものと存じます。よろしくお願い致します。

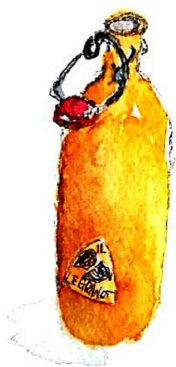


イラスト 飯島和子

## ふたつの 毛無山

渡部 道明

「毛無山」 数少ない登山歴しか無い私には何か気になる山の名であった。PCで検索すると 全国で 29 座がウイキペディアその他で見出される。毛無森, 大毛無山なる呼び名。又他の呼称との併用もされ太平峰、福田頭もある。どうもわが故郷の…富士山…駒ヶ岳とも違う。分布にしても北海道に 7 座、先住民呼び名 *kenas* (山林) を真似たと考えられており、いずれも植生は良いようである。東北各県では青森 3、岩手 2 (毛無森), 秋田 宮城は各 1、福島 宮城両県は 0、関東 甲信越長野 3、新潟 栃木 (新潟との県境) 山梨 静岡 (山梨との県境) 各 1、あとは鳥取、島根、岡山、広島各県中国山地県境近くに位置しており総計 8 座あり、うち鳥取県江府町 岡山県真庭市、新庄村にあるのは (けなしがせん) と呼ばれております。

なぜ *kenashi yama* なのだろうか? 北海道では地名は先住民の呼び名に漢字を当て嵌める場合が多々あり理解出来ましょう。本州において毛無森を含む *kenashiyama*, *kenas h igasen* は 木無山、木成す山か? 更には民族学的な見方、考察が必要なのか 私にはよく判りません、どなたか御教示願えれば誠に有難く幸いです。

なぜ ふたつ か?

新ハイ横浜支部山行提案を予定し 下見山行を柴野先輩に賛同戴き 2008 年 6 月 17 日御坂山塊毛無山に、2009 年 3 月 31 日天子山地 毛無山に実行いたしました。然し何れも支部山行計画への提案を取り止めております。 いずれの山も新ハイ好みの味のある山でしたのでこの機会に大略ご報告方々これからを考えてみたいと思います。

山梨県 毛無山

皆様ご承知の如く此の山は河口湖と西湖の中ほど北側に位置し十二ヶ岳と共に御坂山から連なる黒岳、破風山、節刀ヶ岳、鬼ヶ岳に抱かれるように位置しており河口湖にその俊敏な山容を映し出しております。

私が御坂山塊に興味を持ったのは河口湖畔に宿った時 南側の富士山が当然主役であるのですが うしろ側に河口湖を前衛として御坂山塊の山々ガ荒々しくもあり、光の変化により時には いろどりの優しく重なり合い迎えてくれたことでし

た。 天下茶屋からの展望、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖それぞれが周辺の山々と織りなす景観に魅せられ足を踏み入れたいと強く思ったものでした。

2008-6-17 朝 晴れるも文化洞登山口より曇天 視界は全く利かぬ中樹林帯の急坂を単調に登り詰め木々が無くなった処から山頂直下の急坂、だが周辺の状況は想像するのみで残念。

毛無山頂より十二ヶ岳へ狭い峰道のアップダウンを繰り返しながら番号のついたピーク表示板を追っていたのが 十一ヶ岳からキレットが有りロープの助けを借り降り立った処に吊り橋、更に急な岩場を鎖・ロープを使いながら十二ヶ岳へと登り返す最も危険な所だった。山頂での展望がないまま西湖バス停迄 全歩程 6 時間 25 分、それなりに満足した山行でした。

問題は十一ヶ岳から十二ヶ岳の急峻な岩場でのロープ路、吊り橋、狭い登山路での交差・すれ違いが不可能な所が多い、従って集団での山行は難しいとの判断で支部山行への提案を断念致しました。

此の下見山行で河口湖駅迄のアクセスで新しく高速バスの利用を試み其の利便性に感服いたしました。短時間、乗り換え少なし、低料金と三拍子揃い踏みでしたが道路交通事情の検討は充分必要かと存じます。その後山中湖、河口湖方面は東急田園都市線 市が尾駅発着東名高速バスが最も利用価値が有ろうかと存じております。

#### 静岡県 毛無山

山梨県毛無山を断念後 日本一の標高(1945.5m)を誇る天子山地の毛無山の下見山行を前回同様柴野さんと 2009-3-31 に日帰り山行として行いました。日帰り山行の常として登山口迄のアクセス時間が重要であります。この日 東海道本線富士駅又は身延線富士宮駅からレンタカーの利用を検討し道路事情より身延線源道寺駅下車トヨタレンタで車の借用と本番に備え 9~10 人乗りバンのチェックに手間取り登山口の麓を出発出来たのは予定より一時間遅れの 10 時 45 分であった。 途中地蔵峠分岐、不動の滝展望台等順調に高度を上げ尾根迄は一本調子の急坂を喘ぎながら登り途中 12 時 50 分昼食後 8 合目手前から つつじの葉や樹々の小枝に樹氷が着きだし更に残雪が固く軽アイゼンを装着の急坂登りも 9 合目の峰道でお終わり下部温泉への道を左に見ながらひたすら足を運び見透視の無いまま霧に包まれた山頂標識にタッチしたのは丁度 15 時であった。 山頂は白っぽく寒々として何もみえずなので 10 分程で早々に下山開始、地蔵峠(16:45)、日が落ち段々と暗くなるなか ヘッドランプの光を頼りに暗闇の中沢の徒渉を何度繰り返したのか や

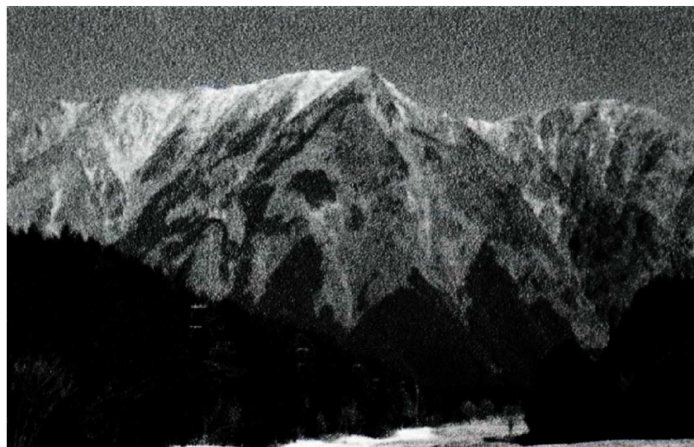


っと合流点につき（18：55）スタート直後の堰堤を過ぎてからの油断で随分と廻り道をしトヨタレンタの門限に大いに気を揉んだものでした。

天子山地 毛無山も下見山行の結果支部山行計画に提案しませんでした。多少の積雪があったにせよ 団体行動で日帰り山行に 歩程8時間10分+ $\alpha$ 、横浜圏から登山口迄の所用時間が片道3時間前後であれば 1日の行動時間は14.～15時間となり常識として無理なことでありましょう。

従って「ふたつの毛無山」を考えるに 一泊2日の日程で御坂山塊 毛無山・十二カ岳・節刀ヶ岳・鬼ヶ岳と縦走し翌日 天子山地 毛無山を計画するか 更に一泊し天狗岳・長者ヶ岳・鬼が岳と縦走を試みるのを 4月5月頃の天気の安定している時に実行するのも趣きが有ろうと考えております。 なにしろ ふたつの毛無山下見山行展望 「零」でしたのですから！

以上



静岡県 朝霧高原から毛無山 1945.5m

# ありがとうございます

佐藤 哲夫

昭和 20 年代前半東京のど真ん中港区芝でもまだ自然があった。芝公園の低い里山には、それなりの木々の繁みがあり小川の細いせせらぎが流れ、かくれんぼ・水雷艦長・海老がに取り、東京湾では第六台場での海水浴・はぜ釣り・アサリ採り我々子供達を楽しませてくれた。これらが現在まで続いている自然との付き合いの原点であった。

小学校高学年になると箱根仙石原の「ニコニコ学園」（林間学校）に昭和 27 年夏に滞在し、その時登った金時山が懐かしい、未だ若かった金時娘がそこにいた。ズック靴で登ったので むしろ冒険であったのだろう、引率の担任の豪胆さには頭が下がる。山への憧れ 登山の魅力へと結びつき若い時代の本格的なものとなった。当時は ただ頂上を目指すスポーツとしての色彩が濃く周りの景色・草花などは二の次でピークハントで満足していた。

社会生活に入ると仕事や家庭などの事情で山登りを中断せざるをえなくその期間が永過ぎるほど続き、先が見えてきた 40 歳後半になると古い仲間と再び開始することが可能となった。ペースもゆっくり年相応のスタイルになってきた、登りは息切れがすれば整え鈍くなった足元への距離感を気にしつつ慎重に下り、草花や風景をも楽しむことがようやく分かってきた。

新ハイは 本部山行から参加し、逗葉アルプス山行で 80 数名の多数参加のため、昔の山仲間が本部リーダーとして応援に来ており 40 年ぶりの再会が出来た。彼の勧めで横浜支部に入会した。支部入部以降 諸先輩の存在とご活躍が日常の体調管理ややる気を醸成している。

昨今は、ある数を目指す登山方式が大いに流行っているが、それを気にせずに同じ山々をコースや季節を変えて訪れる丁寧登山を目指したい。山へ行ける健康体と環境を保持できるのも家族と両親のお陰であり、また登山道・小屋など施設を守る人達や更に便利になった交通諸施設のお陰である。大いに感謝しています。ありがとうございます。

以上

## 「2011 はる」

鈴木 国之

春になると、私が花から花へと山旅をしているのを昔の山仲間が聞いて、花追い人（養蜂家）の様だねと言う。山に次々と花が咲き始めると急に忙しくなります。花は記憶が新しいうちがとても新鮮なので最近（2011年・春）の山（花）を綴ってみました。

### 花新田（福寿草） 秩父山城

何年か前に山シャクヤクの自生地をインターネットで調べていた時に、たまたま秩父の大ドッケの直下に福寿草の群落の自生地があるとの書き込みを見たのが最初でした。

その後、調べてみると2001年2月に「岳人」が2002年3月に「山と渓谷」で紹介されてから賑わう様になった様です。

地元の話では一時、花新田（地元では自生地をそう呼んでいる）を売りだそうとの話が持ち上がりましたが、たまたま山に事故があり、売り出すには一般（なれない人）の登山者が大勢入山する様になるとコースの整備とか遭難対策、また自然保護が守られなくなるのでは等の理由で「来るものは拒まず、しかしコースの整備もせず」の現状維持になったとの事です。

96歳を過ぎて亡くなった女性が亡くなる前に、娘の時に花新田に登って見た福寿草の大群落が忘れられないとその人に語ったと言う。地元の人が見守ってきた自生地も大きく変化する事無く福寿草は咲き続けています。

今回の山行計画に当たってはインターネットからの情報を元に時間をかけて調べましたが、数ある中で地図上での自生地の場所を特定する資料としては一つだけあってそこには“自生地？”と書かれたもの（国土地理院）でした。

出発の2日前に、何気なく見ていた同じ山城の大平山のガイドの略図には大ドッケの下に自生地と書かれていましたが、先の地図とはあきらかに谷が違っていました。

当日、一抹の不安を抱きながら出発。秩父を過ぎ浦上ダムを通りすぎるとまもなく浦上に着く。暗い谷間の傾斜地に数軒の家屋がならんでいます。浦上のバス停から少し戻り浦山川を渡って林道を登り始めます。インターネットの記事を一つ一つ確認しながら廃村になった細久保の集落の下の道に行く。つい最近まで最後まで残っていた年老いた住人がバイクで走っていたと言う舗装されていた林道も今では



山道と変わらぬ様相になっています。

廃屋を過ぎ、最近設置された鹿よけネットをいくつか越して、伐採地後のザレ場をトラバースして、谷に降りるポイントを見逃さない様注意して進みます。

踏み跡通りに谷へ降りる。二股の谷の出合いで一休みしていると後から6人のパーティも下りて来て休んだ。福寿草の話をするると7年前に来たとの事。「よかったら一緒に」の言葉に甘えて、6人の後ろを歩くが、谷の出合から谷をさらに下の方まで降りて尾根の向こう側の谷に入ろうとしている、調べた資料にはそんな記載が無い。埒があかないので、6人から別れて先ほどの谷の出合いまで戻り、休んだ時に見た林の木の赤布をめがけて登る。踏み跡があり、踏み跡通りに歩くと小さな谷に出て、その先の尾根を越えて隣の谷に降りる。入力してきた携帯GPSのルート（自生地？の地図）と明らかに違う。その谷筋を進む。

後は迷う事無く花の谷「花新田」に到着。その場所は沢状態も終わり小高い丘の様な佇まいで残雪が周囲に残り、その一角を埋め尽くす福寿草の群落があった。100年以上前から続く自然の営みがそこに見られた。

#### 坂戸山（カタクリ） 新潟六日町里山

新潟六日町の里山の坂戸山を訪れたのはもう7年ほど前、上州子持山を登った日の後、清水トンネルを越えて雪国に来た。群馬県側は桜も咲き晴れて暑かったのにトンネルを越えた瞬間、小雨がぱらつき周りには残雪が残っていた。明日登る六日町の登山口からカタクリの開花を見に行く。咲き始めてはいたが、麓でこれからという状態。周囲には残雪も多く今回は時期尚早といさぎよくあきらめた。



角田山・多宝山と何年か連続して早春の新潟の里山に通った時も坂戸山はいつも素通り。

仕事の仲間の一人が六日町の故郷から横浜に出てきていて十数年いっしょに仕事をしていた。何年か前、その人の父親が亡くなり急遽親の家業（クリーニング）を継ぐ為、六日町に戻っていった。やはり会社の友人でその友人の奥さんの実家が六日町の隣の五日町の生まれだった。よく五日町に家族が軽自動車ですべて帰省していた時の話など印象に残っていた。新潟六日町・五日町周辺にはなぜか心惹かれる何かがあった。

5月連休最後にチャンスが訪れた。今度はトンネルの手前側はどんよりした曇り空。土樽を通り湯沢、石打を過ぎる頃から日差しも、もれ始め六日町に来た頃は晴れ上がり上々の天気になる。整備された登山口から城坂コースを歩く。

家臣屋敷跡を過ぎるとさっそくカタクリの群落が出始める。登山道の両側にキクザキイチゲ、イワウチワ、ショウジョウバカマと続く。

途中地元の人が通常カタクリの花弁6枚のものが、7枚8枚が数多くあるんだといいながらしゃがみこんで一生懸命探している。

こちらは写真を撮るので精一杯。抜きつ、抜かれつしながらも同行する形になった。声がかかった7枚8枚の指さされたカタクリを撮りながら所々の大群落に心奪われながらも登る。カタクリの大群落で有名な頂上直下の桃ノ木平はまだ雪で覆われていて、ようやく雪の上に芽が出てきているところ。

桃の木はかなりの大木で花は白っぽく、普通山梨の「一の宮」などで見るピンクとは違っていた。地元の人はこちらから下ると言うので別れ634mの坂戸山頂へ。

混雑していた山頂で昼食。午後は次の目標である五日町にある五万騎山へ。

#### 戸谷峰（二輪草） 松本郊外の里山

戸谷峰（トヤミネ）を知ったのは2009年の岳人発売の「春山」のムック本で紹介されていた。この本（春山）から春の伊吹山・高尾山・鍋倉山と登った。

特集では「花の山を歩こう」とか「新緑と残雪の山々へ」とかの記事で各地の山々が紹介されている。戸谷峰の書き出しは“花の小道をぬけてアルプスの展望台へ”のサブタイトルで始まる。二輪草の群落が紹介されていて山頂からは北アルプスが望めるとも書かれていて興味をそそられた。

昨年5月連休に新潟柏崎の米山を登った帰りにここに寄る予定が別の山に行った為、戸谷峰山行は流れた。もっとも今回出かけて行ったのも幾つかある候補のなかで他のところの花の時期が終わった為の消去方で残った。時期はまさに紹介されていた日とほぼ同じ。場所は信州松本の郊外にある標高1629m。登山口が約1000mほどなので山頂まで629mの登りになる。

少し登ると二輪草が出てくる。まもなくジュウニヒトエが道ばたに。ウスズミザクラを見ながらさらに登る。頂上間近まで登ると林相が変わり少し湿った地面に這いつくばる様に二輪草が咲き始めていた。通常二輪出るから二輪草と呼ばれるがまだ最初の一輪でしかも背も低い。残念ながらまだ早かったか。雰囲気の良い林を抜けると頂上へ。日当たりの良い頂上には黄色いキジムシロと真っ青なハルリンドウが暖かい日差しに花開いている。常念岳から蝶ヶ岳の稜線は何とかみえるが、燕・餓鬼岳は雲で定かでは無い。長野から来たと言う団体が登ってきたので山頂もにぎやかになる。昨年この近くの京ヶ倉を登ったと言うとそのなかの一人が、先週京ヶ倉の近くにてヒカゲツツジの花見だったとの事。懐かしい。

## 二ツ岳・水沢山（ミツバツツジ・ヤマツツジ） 榛名山

行き先の二ツ岳と水沢山は榛名山の一角の山で出かける前の日に決定。理由はほかの山で計画していたが、花がよさそうとの情報（朝日新聞の連載の「山頂のごほうび」で水沢山が紹介）で急遽、地図ガイドなどを用意し準備した。

以前、登山地図は事前に国土地理院（5万分の1又は2万5千分の1）か山と高原地図（登山する地域のもの）のものを書店で買う必要があり、急に決まった山行では持って行けない状態がかなり続いた。最近パソコンで国土地理院からの地図をダウンロードし、予定の場所だけを印刷する事が出来るようになった。

またフリーソフト（無料）の3Dカシミールをインストールし地図上に印し（ウエイポイントと呼ぶ）を付けたり、地図上の表記の無い山に山の名を記入する事。またGPSを持っていればその地図内の情報をGPS内に取り込む事も出来る。ただ国土地理院の地図の情報（登山道）も実際と違うところもあつたり、記載が無くてもしっかりした登山道があつたりするので、事前に情報をあつめるか、現地の標識を見る必要はある。GPSもつい最近までは地形図の情報だけで登山道の記載も山小屋、水場の記載も無かった。今回は国土地理院の地図では詳しく判らないので現地の案内と標識をみながら歩行。

森林公園から登山開始。まず二ツ岳（雄岳）を登る。早速ミツバツツジが登山道のそばに見られる様になり、新緑も綺麗だ。途中岩の多いところにあるヒカゲツツジの淡い黄色が新鮮に見える。

放送設備のある建物を回り込んで二ツ岳（雄岳）山頂へ。途中にはシャクナゲと白花エイレンソウが咲いている。

二ツ岳（雄岳）を降りてから二ツ岳（雌岳）を往復した後、二ツ岳の山腹を回りこんで、水沢山の麓までのトレッキング。実に楽な樹林の中の道、振り返ると相馬岳が聳えているのが見える。

水沢山の登りも今まで以上にミツバツツジが増え日当たりのよいところにはヤマツツジも花ひらいている。昼食をとった山頂はとても暑かった。もう夏。



## 吉林省から世界へ

玉川 恵子

「大西洋を自分の船で南下したら面白いでしょうねえ。」ボストン湾を見はらしながら、金ちゃんが夢見る口調でポツリ。2010年8月下旬のことです。

このとき「金ちゃん」こと金光林博士は、Visiting Scholar（客員学者）として研究旅行中2番目の訪問先ハーバード大学のあるケンブリッジ市内に着いて2週間も経っていませんでした。そこへ私が同僚の漢詩文の専門家を誘い大学見学に押しかけ、隣接しているボストンの街も金さんに案内してもらったのでした。

朝鮮族の金さんは中国東北部吉林省の農民の出身。子供の頃、家が貧しく食事は青空の下でどんぶり飯だったということですが、学業優秀で日本には国費留学生として来日。苦勞の末、東京大学から博士号を授与され、永住権も得て、今や日本在住20数年になります。金さんの博士論文は、明の永楽帝のもと巨艦数十隻、乗員1万を越える大艦隊で東南アジア、インド、東アフリカまでも到達する大航海をコロンブスより1世紀も早く行った「鄭和」についてでした。大陸のそれも内陸の吉林省、また農民出身の金さんが子供の頃から憧れたものは西遊記の世界と海だったといいます。山河を越え沿岸へ、海を越え日本へ。知らない世界を知りたいことを夢見たのでしょうか。大西洋を南下したら面白いだろうという思いは鄭和に通じる冒険心の現れだったかもしれません。東京大学から博士の学位を取得後15年間地方の大学で教授をしていた金さんは、50歳になった記念に欧米の大学に研究旅行に出かけようと一念発起。故郷で事業に成功した長兄が貸してくれた300万円を資金に2009年9月、太平洋を越え初めての米国は西海岸へ。カリフォルニア州・バークレー市にある最初の訪問先カリフォルニア大学では、中国にはない、森の中にあるようなキャンパスの美しさに浸り、自由な学風とカリフォルニアの風光を楽しんだということです。東海岸のハーバード大学への移動の際は、国土を見なければその国は本当には分からないという信念から、鉄道での米国横断を決意。西海岸ポートランドから東海岸ボストンまで通っているAmtrak網を利用。感想は「高速電車の車窓から延々と何時間も続く中西部のトウモロコシ畑を見て、米国の農業国としての底力を思い知りました」。

2011年5月、金さんは米国を離れ、今度は大西洋を越え最後の訪問先ロンドン大学のSOAS（東洋アフリカ研究所）へ。更にその先は？もちろんヨーロッパ大陸へ。今この瞬間にもパリ、フランクフルト、ブリュッセル、ジュネーブを廻っているはず。そして絹の道を通り中国へ、海を越え日本へと、世界一周して2年間の研究旅行を締めくくりたいと考えているようです。その話を、日本に戻るといって今秋、金さん本人から聞くのが何よりの楽しみです。

## 過去 5 年間の横浜支部山行実績を見る

2006 年 4 月～2011 年 3 月＜H18/4～H23 年 3 月＞

池田 邦雄

横浜支部は 1956 年（昭和 31 年）設立され、2011 年結成 55 周年を迎えた。この間支部ニュースは 1959（昭和 34）年 11 月以降毎月発行され、2011 年 3 月号が第 620 号となった。50 有余年にわたりほぼ毎月発行されて来たが、往時の担当者各位の苦心の様子の一端は「羊歯」31 号（2001 年 3 月発行）の北村襄・熊谷松治・星野喜美子氏等の記事に詳しく述べられている。一時は支部ニュースが、はがきの大きさであった時代もあったとか。原紙を切りガリ版刷で発行した時代からリコピー、ワープロを経て現在へと繋いだ担当者の方々の努力と苦心が偲ばれる。

この 55 年間に企画された山行計画は 2011 年 3 月末で 1869 回となった。近年ほぼ 5 年刻みに記念号的に発行されているこの「羊歯」は本号を持って 33 号となる。「羊歯」前号において、過去 10 年（1996 年～2005 年）をさかのぼり横浜支部の先輩諸氏がどのような山や場所を目指したか、人気の山や地域はどこだろうかという問題意識のもとに支部ニュースを紐解き調査してみたが、本号においても同様の趣旨でその後の 5 年間の活動を集計してみた。

この間の山行計画は 2006 年 4 月 2 日石老山・石砂山の 1479 回から始まり 2011 年 3 月 31 日ミツバ岳～屏風岩山の 1869 回まで 391 回であった。

◎1996 年 4 月～2006 年 3 月の間（以下過去 10 年という）と比較しながら最近 5 年間、2006 年 4 月～2011 年 3 月（以下過去 5 年という）の活動状況を概観してみたい。なお、本件山行記録等集計に当たっては支部員各位から資料の提供を頂けた。

### ○会員数 別表 1-c

会員数は 2005 年度末時点で 63 名であったが、2011 年 3 月末では 78 名になり約 23%増加している。過去と比べると最近 5 年間のうち特にこの 2 年の増加が顕著である。2009 年 6 月から例会会議室を 60 人定員の大部屋に変更したことにそれが象徴される。増加の要因は各人の努力に加え横浜支部のホームページを平成 19 年 6 月 25 日に開設したことも寄与していると考えられる。人々が生活に係るあらゆる情報をインターネットで収集する時代にあって、ホームページは不可欠のメディアと考えられるので、今後ともホームページの維持継続が期待される。



○山行計画数 別表 1-a

過去 10 年間の山行計画は 627 回（年 62.7 回）、最近 5 年間では 391 回（年 78.2 回）であった。一年平均 15.5 件増、約 25%増加である。

○ 山行参加者数 別表 1-b

過去 10 年の山行参加者数は 5635 人、年平均参加者数 563 名であるが、1996 年度 722 人をピークに漸減し、2004 年度は 395 名まで低下。最近 5 年間を見ると参加者数 3118 人、年平均 623 名であったが、2008 年度以降漸増し 2010 年度は 826 名と過去 10 年平均比約 1.5 倍になり、山行計画数・参加者数とも大きく増加している。

○ 山行地域 別表 2（地域分類は筆者の個人判断による）

山行地域は基本的に近隣地域が中心で、100km 圏内が 70%を占めている。

\*地域分類では、中央線沿線の企画が最も多く、次いで当支部の裏庭とも言うべき丹沢山地、次いで神奈川県内の箱根・三浦半島など近隣の低山逍遥などが多く企画された。丹沢は西丹沢地区の山々への企画が多かった。

\*過去 10 年にはあまり見られなかった「秘湯探訪を兼ねた山行」、江戸の旧街道「中山道を歩く」「大菩薩から高尾山まで」を長期に渉り刻んで歩く縦走や「深く歩く鎌倉シリーズ」など、シリーズ性を持った企画が新たに試みられ人気となっている。

\*2008 年 9 月に開始した、東京日本橋から京都三条大橋までの旧中山道歩きは 2011 年 6 月第 20 回を持って終了した。3 年がかりの長期にわたるシリーズ企画であったが、第 1 回から第 20 回までの参加者は延べ 398 人で人気の企画であった。

\*平成 18 年度に支部創立 50 周年の記念行事の一環として、「県内の山 50 山」を選定し、以後の山行目標に積極的に加える事として前号（羊歯 32 号）に発表されたが、これらの山々は最近 5 年間にすべて一度は踏破されている。

○「係り・リーダー」の状況 別表 3

過去 10 年は年平均 11 人の方々を担当してきたが、最近 5 年間では年間平均 16 人と、係り担当者数は増えている。過去 10 年は 627 回の山行を 38 名で担っていたが、最近 5 年間では担当した係りの人数は 28 名。うち上位 5 名の人々で 60%弱の企画を担当している。上位 5 名が 60%程度を担当している状況は過去 10 年も最近 5 年間もあまり変わらない。但し、最近 5 年の後半は係り担当者の入れ替えが顕著で、若返りが見られる。

○以上概観すると、最近 5 年では会員数は漸増し企画数も増え参加者数も増加して全体として活動は年々活発化し当支部の堅調な発展が伺える。

◎問題点

以上のことから当支部は安定した発展を続け、親睦の実を上げていていると見てよいと思うが、問題点がないわけではない。ご多分にもれず在籍者年齢の高齢化である。

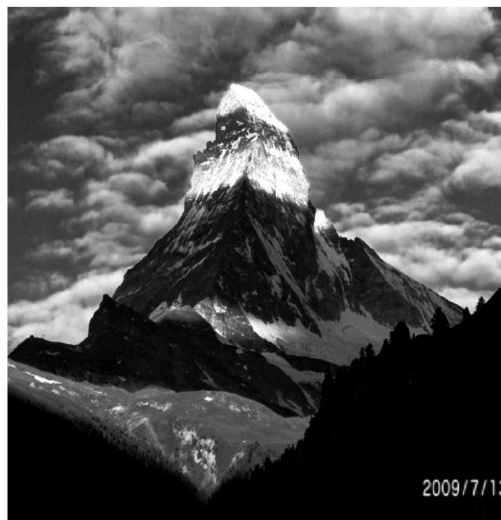
平成 22 年 10 月末時点で平均年齢は約 68 歳。元気な高齢者集団であることの誇りはあるものの、最近 2 年の新規入会者の平均年齢も 64 歳～65 歳。平均年齢は年々上昇して行き、このまま推移すればここ数年の内に 70 歳を越えることは必定である。今後長期にわたりこの支部が有意義な活動を続けていくためにも会員の平均年齢の若返り、若年層会員の増加が望まれる。

○健康で豊かな人生に不可欠な、自然との触れ合い、自然を通じての健康な身体作りの喜びを、若い人々に伝え、広く社会にその機会を提供していくことは会の存在意義の一つでもあると思うが、そのためには、HP 等を通じて引き続き社会に公報を続けることが重要であるが、更に我々一人ひとりが若年層の参加者を増やすように心がけて行くことも大切なことであろう。

◎ 昨年 6 月の支部例会で、西丹沢山域に個人山行で入山した男性が行方不明になったままになっているとの事故例が報告された。山岳事故は高齢者に多発している。

多くのアルプスの山々を踏破し、マッターホルン初登頂（1865 年）を果たしたものの、その下山中に仲間を失った著名な登山家エドワード・ウインパーがその著書「アルプス登攀記」（日本語翻訳名。1871 初版）の最後にこんなことを書いている。「山に登るのはいいことだ。だが、気力や体力がいくらあっても行動に慎重さを欠けば、瞬時にすべてを無に帰し、人生を破滅に導く。急ぐなかれ、一步一步を慎重に歩め、何が破滅に至るのか、まず最初に良く考えよ。」

○もう 140 年も前の言葉ながら心して聞かなければならない言葉だと思う。



雲の切れ間から 3 段の朝光に輝くマッターホルン

2009-07-13 ツェルマット 撮影 筆者



## 編集後記

今年3月11日に発生した東日本大震災で山どころではないと人生が変わった人、或いは変えた人がいる中で、自分は何をしようかと立ち止まって考えたが、既に昨年から企画された55周年の記念事業の一つである「羊歯」を途中で投げ出しているのか、それは無責任であり、自分自身としても許されないと思いました。幸いにも残されたメンバーの献身的努力とチームワークの良さでここまで来ました。有難う！支部の皆さん 有難う！そして「山」よありがとう！（芹沢隆久）

編集委員に指名され何も分からずに会議に参加してただけでした。会議に参加するたびに編集が進み「羊歯」が出来上がっていくのを感じていました。委員が2名も少なくなり、編集の取り纏めをして頂いた池田さんの大変なお骨折り無くしては出来なかったと思います。しかし多くの会員からの原稿を下見させていただきましたが、皆いろいろの分野で活動されていることがとても新鮮に感じ、横浜支部のこれからの活躍に期待が持てました。（青柳征勝）

平成22年10月「羊歯」編集委員が任命されて一年、支部会員の皆様方のご協力を得てようやくここに「羊歯33号」を上梓することができました。前32号を手本に、少しでも近づけるべく努力しましたが力及ばず、つたない出来となり不十分、不満足なところが多々あると思います。「非力ながらも真摯に努力したつもり」に免じてなにとぞご容赦いただきたくお願いします。なお、投稿下さった方々はもとより編集委員以外の多くの方々から編集作業等に関し指導、助言、資料提供等多大なご協力を頂きました。ご協力くださった方々は皆さん間接的ではありますが編集に携わられた方々と言えるのではないかと思います。ここに至るまでにいただきましたご支援に紙面を借りて心からお礼申し上げます。また55周年事業の諸行事もすべて成功裡に終えることが出来ましたが、多くの事業を精力的に進めてくださった実行委員の皆様には大変ご苦勞様でした。ありがとうございました。（池田邦雄）

支部長から「55周年記念誌「羊歯」の編集委員をお願いします」と頼まれよく内容も分からないまま引き受けました。「羊歯」とは何ぞや！全く見たこともない物体の編集委員を引き受けてしまい、戸惑うことも多々ありました。当初編集委員は7名、一人減り二人減り、心細くなりましたが、他の4名の編集委員の方々に支え

られ、また、前回 50 周年で携わった人達の協力を経て、何とか完成にたどり着きました。皆様からの原稿も、集まるかどうか当初は心配でしたが、予定以上の原稿が集まり、ほっとしました。皆様ありがとうございます御座いました。新人の私がこのような大きな仕事をやらせていただき、やっと横浜支部の一員になれたかなあと思っています。（板垣恵美子）

編集なんて初めての体験でした。最初は困惑状態でしたが、皆さんと一緒に委員会を重ねる毎にその責任の重さを感じ始めた次第です。原稿も始めは思うように集まらず、焦りましたが、後半次々と集まるようになり、編集の楽しさを覚えるようになりました。特に皆さん山歩きも達者ですが、頂いた原稿の一枚一枚の素晴らしい内容に私自身も勉強になり、感動を覚えました。皆様のご協力により、55 周年記念の「羊歯」の完成を見ることが出来ました 有難うございます。（湯浅克枝）

本誌編集・印刷製本など質的にも量的にも編集委員 5 名ではこなしきれなかった作業を以下の方々にお手伝いいただきました。師走の何かと慌ただしい時期に大変有難うございました。（あいうえお順・敬称略）

足立、飯島、岩方、金本、熊谷、栗田、齋藤（郁）、竹尾、谷、花島、和智

## ◎支部創立 55 周年行事に携わった委員会と構成者氏名

### 1 平成 23 年度支部委員 14 名

支部長 芹沢隆久、副支部長 金本勲、竹尾亮三、

委員 足立忠彦、小澤勝太郎、平川俊一、青柳征勝、飯島和子、井上忠秋、

和智邦久、柿沢泰子、花島幸子、大川れい子、谷真理子

### 2 55 周年記念行事準備・実行委員 8 名 ○はチーフ

総合委員長 芹沢隆久、○金本勲、足立忠彦、井上忠秋、佐藤哲夫、岩方美津子、石部正子、小倉靖子

### 3 羊歯編集委員 5 名○芹沢隆久、青柳征勝、池田邦雄、板垣恵美子、湯浅克枝

注：本誌掲載のすべての記事・画像等の無断転載を禁じます。

